蒼・天～蒼き死神と、天の御使い～

東堂院 紗樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼・天～蒼き死神と、天の御使い～

【Ｎコード】
Ｎ８３１３Ｕ

【作者名】
東堂院　紗樹

【あらすじ】
恋姫と真恋姫のストーリーをもとに、オリキャラが暴れます。
一刀は蜀、しかもかなり強くなる予定です。
さてはて、どうなる事やら…。

プロローグ（前書き）

オリキャラものはダメっていう人、即バックを奨めます。

プロローグ

そこは、とある探偵事務所。都内某所に建つ貸ビルの３Ｆに、表向きは堂々と事務所を構えているが、実際それは表の顔という言い方が適当だろう。

【？？】
「……」

【？？】
「どうだい？」

事務所には、二人の男がいた。一人はデスクの前に座り、一本の木の枝を何やら真剣に見つめている。眼鏡をかけ、どこか清閑な顔つきをしており、その若い見た目以上の年齢を感じさせる。
もう一人は、少々軽薄そうな男だ。行儀も悪く、机のふちに腰掛けて顔だけ彼の方に向け、得意げにニヤけた表情を浮かべている。無精髭を生やし、男のくせにポニーテールにするほど髪が長いときている。髪色は黒だが、脂とホコリで汚れ何とも薄汚い印象を与えている。
服装も、きっちりスーツを着こなす前者の彼と違い、後者の彼はボロボロのマントに、これまた汚れた麻布を服の形に縫ってあるだけみたいなものを着ている。

【？？】
「…紛れもなく、本物の金仙樹（きんせんじゅ）か。」

【？？】
「君にとっては、珍しくもないかな～？」

【??】
「いや。眼福痛み入る…現物を見るのは初めてだ。」
【??】
「そうかい♪そう言ってもらえると、おじさんも嬉しいねぇ。」
机のふちから腰を上げ、男は眼鏡の彼に向き直った。
【??】
「それじゃあ、これでこの間くれた、あの子の情報の件はチャラって事で～。」
【??】
「私の取り分の方が多い気がするが…これは借りでいいのか?」
【??】
「まぁ、そのうち返してくれればいいよぅ～。じゃあね～♪」

そう言い残し、なんと男は室内から忽然と姿を消してしまった。
残された眼鏡の彼は、空野　智輝…表の顔は名探偵、裏の顔は闇商人。いわくつきの品やお宝、様々な情報を売り買いしている。
今でこそ、悪どい仕事はしていないが、その昔…学生時代には、手に入れた情報を脅迫のネタとして売り、多額の金を得ていた時期もあったらしい。
彼によって人生を狂わされた人間の数は、恐らく手指で数えられる範囲では済まないだろう。
【智輝】
「…そのうち、か。」

彼の呟きには、まるでそんなチャンスがもう無いかのような、それが分かっているかのような響きがある。

【智輝】
「蒼馬…君はつくづく、選択を間違える運命なのだな。」

神術師…時間や空間、果ては次元（注：ここでの意味は平面とか立体という意味ではない）を超え、無限に存在する異世界を行き来できる者。言葉通り、神の力を自ら使役できる能力者の事を言う。しかし、彼らがその力を使う為には、存在の根源である魂を削らなければならない。やがて、魂が…その存在を支える魂が尽きれば…彼らは、消滅する。

【蒼馬】
「さてと、次のお宝ちゃんを探しに行こうかねぇ。」

智輝のもとから時空間転移で姿を消した男は、時空の狭間とでも言うべき亜空間を気ままに漂いながら、転移地点を探していた。蒼馬と名乗るその男は、自称・異世界を旅するトレジャーハンターである。

【蒼馬】
「うーん…おりょ？」

何かに気がついたらしい蒼馬は、明滅しながら縦横無尽に流れて行

く映像の川の一点に目をつけた。

【蒼馬】
「あれは…ふむ。」

蒼馬は転移先の時空座標を確認すると、時の大河の漂流ごっこを止めて表に出た。
茂みに降り立った彼の前方、開けた道の上では、白い制服を身に纏った学生風の男二人が、互いに殺気と闘志を漲らせながら対峙していた。
一人は黒髪の少年で、手には木刀を握り正眼の構えをとっている。かなり緊張しているらしく、必死に恐怖と闘っているのが分かる。
もう一人は白髪の少年で、大きな古い鏡を脇に抱えながら、素手で構えている。その表情は苛立ちに満ちており、ともすれば黒髪の彼を殺してしまいかねない様子だ。
さて蒼馬は、そんな少年たちより、白髪の少年が抱えている銅鏡を注視していた。

【蒼馬】
「ふーん…あれは、まさか……」

何やら難しい顔をしているが、いい加減むっさいので放っておくとしよう。

【白髪の少年】
「…どうやら、覚悟は決まったらしいな。ならば、苦しまないように殺してやる。」

白髪の少年が、腰を落とし丹田に溜めていたのであろう気を溢れさせる。

【黒髪の少年】
「やれるものなら…やってみろよっ！」
対する黒髪の少年も、浴びせられる殺意を勇気で振り払い、木刀に気を込めた。

【黒髪の少年】
「爺ちゃん直伝、薩摩隼人の気概、ナメんじゃねぇぞコラァッ！」

【白髪の少年】
「良い度胸だ。なら死ねよーっ！」
次の瞬間、二人は肉薄していた…正確には、白髪の少年が地面を蹴り、その距離を一気に詰めたようだが…それを待ち構えていたかのように、黒髪の少年は木刀を振り下ろした。
相打ちか…否、白髪の少年が繰り出した拳の方が、僅かにだが先に届こうとしてい…

【蒼馬】
「はいはい、おイタは駄目だよ～。」

【少年二人】
「「なっ！」」

ガシッ　ドガッ

……。……。
それまでブツブツ言いながら思案していた蒼馬が、何を思ったのか突然二人の間に割って入った。

左手で白髪の少年の手首を掴み、右手で黒髪の少年の木刀を受け止め、なお平然とヘラヘラ笑っている。

【白髪の少年】
「だ、誰だ貴様っ！」

【蒼馬】
「おじさんかい？おじさんは蒼馬…トレジャーハンターさ。」

【白髪の少年】
「ふざけるな！」

白髪の少年は素早く蒼馬に向かって蹴りを放った。しかし…

【蒼馬】
「魂鋼（こんごう）」

ガァンッ

【白髪の少年】
「なっ！」

硬質な音を響かせて、少年の蹴りは跳ね返されてしまった。その拍子にバランスを崩し、脇に抱えられていた銅鏡がするりと…滑り落ちた。
その場にいる三人が一斉に手を伸ばすが…誰一人それを掴み取ることができず、最後に黒髪の少年の指先が軽く触れるのとほぼ同時に、鏡は地面に落ち粉々に砕けてしまった。

【白髪の少年】

「しまった！」

白髪の少年が苦々しげに顔を歪ませたのを最後に、辺りは眩い光に包まれ何も見えなくなった。

そして同時に、強烈な引力の嵐が辺りに吹き荒れたのだった。

プロローグ（後書き）

修正版です。

いえ、ただ「」の使い分けがしたくて…それで訂正してたら…何か全話再投稿するハメに…。

あ、「」の使い分けですが、一応…

〈主に武器などの固有名詞〉

《特殊な固有名詞の読み》

‘漢字変換不能部分’

という感じです、今のところは…。

では、改めて今後ともよろしく。

第一話　死神、覇王と相見える

【？？】
「…流れ星？不吉ね…」

【？？】
「……様！出立の準備が整いました！」

【？？】
「……様？どうかなさいましたか？」

【？？】
「今、流れ星が見えたのよ。」

【？？】
「流れ星、ですか？こんな昼間に？」

【？？】
「あまり吉兆とは思えませんね。出立を伸ばしましょうか？」

【？？】
「吉と取るか凶と取るかは己次第でしょう。予定通り出立するわ。」

【？？】
「承知いたしました。」

【？？】
「総員、騎乗！騎乗っ！」

【？？】
「無知な悪党どもに奪われた貴重な遺産、何としても取り戻すわよ！出撃！」

【蒼馬】
「…よっ、と。」

蒼馬は爪先から着地して、静かに目を開けた…そこは、見渡す限り広がる荒野で、遠くに山並みが見える以外に何も見当たらなかった。

【蒼馬】
「ふぅーい…流石に焦ったねぇ。」

別に汗もかいてないくせに、わざとらしく服の袖で額を拭うと、蒼馬は改めて周囲を見回した。

【蒼馬】
「場所が特定できそうな物は何もなしか…仕方ない、座標を確認してみるか。」

異世界を渡り歩く神術師のトレジャーハンターである彼にとっては、こんな事態は不測でも何でもない事だった。
強いて例えるなら…いつも乗っている電車に乗り遅れただけ…という感じだろうか？
そんな彼の背後から…

【？？】
「おう、そこの兄ちゃん。」

三人組の男が近づいてきた…この三人、何故かお揃いの黄色いバンダナを頭に巻き、こっちもお揃いの軽装の鎧を身に纏っている。いい年して、しかも男三人でペアルックとは趣味が悪い。いや、この場合はペアとは言わない…トリオか？

【ヒゲ】
「命が惜しかったら、金目の物を置いてきな。」

背の小さいバカそうな男と、常人の二倍以上のの体躯をした大男、もといデブを両脇に従えたヒゲのオッサンが、腰から剣を抜いて蒼馬を脅そうと声をかける。どうやら、こいつらは追剥らしい。
だが、蒼馬はまるで気づいていない…無視しているのだろうか？

【チビ】
「おい、テメェ！アニキを無視してんじゃねぇぞ！」

【蒼馬】
「…あれぇ？」

チビっこい男の声も聞こえていないようだ。というか、何が「あれぇ？」なのか…。

【チビ】
「アニキ…こんな奴、さっさとバラして奪うもん奪っちまいやしょうぜ。」

【ヒゲ】
「そうだな。おい、デブ。」

【デブ】
「おう、わがった。」

まんまかよ！と、思わずツッコミたくなるネーミングというか呼び名だ…。
デブは剣を抜いて蒼馬に斬りかかった…力任せに振り下ろされたそれは、丸太でも真っ二つに出来そうだった。それなのに…

ガギィンッ

蒼馬の後頭部に叩きつけられた剣は悲鳴を上げ、もとの刃渡りの三分の一になってしまった。

ヒュンヒュンヒュンッ　　ザクッ

彼らの遥か後方に突き刺さっている、折れた剣の先…三人が状況を理解するのには、じっくり十秒を要した。

【ヒゲ】
「…チビ、デブ！逃げるぞ！こいつ、バケモノだっ！」

最初に声を上げたのはリーダー格のオッサンだ。咄嗟に、仲間に撤退の指示を飛ばせるくらいには、リーダーの資質があるらしい。

【チビ】
「ひぃぃぃっ！」

チビは真っ青になって逃げ出した。

【デブ】

「ま、まってくれよ〜！」

一足遅れて、デブも逃げ出す…しかし、三人にとっての悪夢は、まだ序の口だった。

【蒼馬】

「…あのさぁ、君たち。ちょっと聞きたいんだけど…」

【三人組】

「――――っ！」

瞬間、オッサンは驚愕と恐怖に顔を壊滅的に歪ませて急停止した。背後に置いてきたはずの蒼馬が、突然…前触れもなしに、目の前に出現したのだ。回り込んだ、じゃない…現れたのだ。そりゃあ、声にならない悲鳴を上げたくなるだろう…。

【三人組】

「「「ぎゃあああああっ！」」」

それでも、右に九十度曲がり再び三人は逃げ出した。

【蒼馬】

「……ふぅー。それで、いつまで隠れてるつもりなのかな〜？」

【？？】

「おや、バレておりましたか。」

蒼馬の呟きに反応し、岩陰から三人の美少女が踊り出てきた。一人は、胸の辺りが大きく開いた白い服を着た青髪の女の子。一人は、眼鏡をかけ緑色の服を纏った秀才然とした女の子。

最後の一人は、長い金髪を揺らし青い衣服を着た…他にも色々とツッコミたくなる格好をした少女だった。手始めに、頭に乗っているのは何だ？

【？？】
「助けに入ろうかとも思ったのですが、要らぬ気遣いでしたな。」

【蒼馬】
「助ける？」

白い着物の女性の言葉に、首を傾げる蒼馬…って、本当に気付いてなかったようだ。

【蒼馬】
「まぁ、困ってるには困ってるから、助けると思って、おじさんの質問に二、三だけ答えてくれるかな？」

【？？】
「ふむ、引き受けた。」

笑顔で快諾してくれたので、蒼馬は状況整理のための情報を彼女たちから聞き出した。
ちなみに、彼女たちの名は趙雲、戯志才、程立…三人で旅をしているとの事だった。

【蒼馬】
「…なるほど、漢帝国の陳留郡ねぇ。」

聞けるだけ聞いて、しばし思案する蒼馬…考えたってどうせ事態を把握できそうにないが、その瞳だけは真剣である。

【稟】
「蒼馬殿は、気づけばこの荒野に立っていた、と仰いましたね？」
戯志才と名乗った少女が尋ねる。

【蒼馬】
「そうなんだよ、いや～まいったねぇ～。」

【稟】
「はぁ…『記憶喪失というわけではないようだ…』」

あまりに軽い調子で話す蒼馬の様子に、少し呆れ気味に眼鏡を押し上げる戯志才…そして、程立というらしい少女は、ペロペロキャンディーを舐めながら眠そうな目で蒼馬を見つめている。いや、正確にはその向こう…地平線の彼方を眺めていた。

【風】
「あれは…陳留の刺史、曹操様の旗ですねぇ…」

【星】
「む、官軍のお出ましとは…興が冷めてしまうな。」

【稟】
「言ってる場合ですか、星。それでは、蒼馬殿…私たちはこれにて。」

【蒼馬】
「うん、色々ありがとう。悪いねぇ、こんなおじさんの話に付き合ってもらっちゃって。じゃ、縁があったら、また蒼天の下で会おう。

」

そう言って、三人と別れた蒼馬は…何故か程立が見ていた地平線の先に向かって、ゆっくりと歩き出した。

【蒼馬】

「…随分と、不思議な世界に迷い込んじゃったみたいだねぇ…」

言いながら、蒼馬はぽりぽりと頭を掻くのだった。

【？？】

「華琳様！怪しい者を捕えました。」

長い黒髪に、赤いチャイナドレスを着た美女がそう告げた。相手は馬上で、金髪のツインドリルを揺らす美少女だ。だが、その瞳に宿るのは紛れもなく王の覇気…凡人なら、直視などできまい。

【華琳】

「ご苦労さま、春蘭。さて…」

お縄につき引っ立てられたのは、他でもない蒼馬だ。まぁ、こんなみすぼらしい恰好で、無精髭を伸ばしていれば、不審者として捕まるのも無理はない。

【蒼馬】

「随分な扱いだねぇ～。」

【春蘭】

「貴様！華琳様の御前で、無礼だぞ！」

春蘭と呼ばれた彼女は、その細腕には似合わない大剣を振り上げる。

【華琳】
「よしなさい、春蘭！」

【春蘭】
「はう…」

少女の一喝で、春蘭は剣を下げた。

【華琳】
「さてと…貴方、名前は？」

【蒼馬】
「おじさんは蒼馬。時にお嬢ちゃん、人に名を聞く時は、自分から名乗るのが礼儀ってものだよ。」

【春蘭】
「貴様ぁっ！」

【華琳】
「春蘭！」

【春蘭】
「うぅ…」

この期に及んで、蒼馬の態度は飄々としている…そんな彼の態度に苛立ちを募らせながら、主の一喝にその度縮こまる春蘭のそばに、

青い髪とチャイナドレス姿の美女が近寄った。

【？？】
「まぁ姉者、そう気を落とすな。」

【春蘭】
「秋蘭～」

【秋蘭】
「あぁ、姉者はかわいいなぁ…」

泣きつく姉を抱きしめ、恍惚とした笑みを浮かべる秋蘭なる美女。

【華琳】
「そうね…私は曹孟徳。陳留の刺史を務めているわ。」

【蒼馬】
「なるほど…これで確信が持てた…」

【華琳】
「何か言った？」

【蒼馬】
「いいや。後に人界の覇王と称される雄が一人、曹操殿が…こんなに愛くるしい少女だとは思ってなかったからねぇ～。おじさん、びっくりしちゃったよ。」

瞬間、もう我慢できなかったのだろう…春蘭が大剣を振りかぶって襲いかかってきた。制止の声も意味をなさない勢いでだ…。

【春蘭】
「貴様、馴れ馴れしく華琳様に…もう許さんっ！その無礼、命をもって贖えっ！」

ヒュンッ　ガギィィンッ

【春蘭】
「なっ！」

周囲にいた誰もが、何が起きたのか全く理解できなかった…振り下ろされた凶刃、その威力を知る者たちは皆、蒼馬の首と胴が切り離されるだろうと確信していた。
しかし、現実は違った…彼女ご自慢の大剣〈七星餓狼〉は、蒼馬の首の薄皮一枚も傷つけられずに、押し当てられたままの状態で止まっているのだ。

【蒼馬】
「…無礼、か…そういう事は、己が身を振り返ってから言えっ！小娘がっ！」

蒼馬の怒鳴り声を浴びて、馬たちが怯え、激しく暴れ出した。中でも、彼の目の前にいた華琳こと曹孟徳が乗る黒馬は、前足を大きく上げて主を振り落としそうな勢いだ。

【華琳】
「絶影！」

その一声で、落ち着きを取り戻したようだが…あと数秒もあれば、彼女は地面に叩き落とされていただろう。

【華琳】
「……貴方、何者？」

周囲を見渡せば、ほとんどの兵が馬から落ちていた…そばにいた秋蘭は、額に汗を光らせながらも蒼馬から目を離そうとしなかった。春蘭は…自慢の大剣を取り落として、尻餅をついていた。

【華琳】
『口が聞けるのは、私だけみたいね…』

【蒼馬】
「…おじさんは、トレジャーハンター…まぁ、宝探しを生業にしている、しがない旅人さ。」

【華琳】
「ふざけないで。一介の旅人風情が、怒気だけで鍛えられた軍馬を怯えさせるなんて…笑えない冗談だわ。」

瞳に宿す覇気の炎を燃やし、彼女は蒼馬を威圧しようとする…が、彼は全く動じなかった。

【蒼馬】
「そう言われてもねぇ～…嘘は言ってないんだけどなぁ。」

【華琳】
「…太平要術の書、という古書に聞き覚えは？」

【蒼馬】
「名前ぐらいなら知ってるよ。現物を見た事はないけど。」

【華琳】
「そう…」

華琳は溜め息を一つ吐き、再び凜とした表情で蒼馬を見下ろした。

【華琳】
「蒼馬と言ったわね。貴方、私のものになりなさい。」

【蒼馬】
「？」

突然の申し出に、蒼馬は首を傾げた。それはそうだ、話がいきなり飛躍しすぎなのだから。

【秋蘭】
「華琳様？」

秋蘭も、彼女の考えが分からずにその真意を問う…。

【華琳】
「旅人であれ何であれ、これ程の実力をもった人材を野放しにするのは惜しい。後に敵となれば、大きな災いとなるわ。でも、春蘭でさえ首を刎ねる事ができないなら、殺す事もまた不可能…いっそ、味方につける方が得策と考えたまでよ。」

【蒼馬】
「…おじさん、人のいいなりになるの嫌だから、裏切るかもしれないよぅ～？」

【華琳】

「その時は、私にそれだけの器が無かっただけの話よ。」
彼女は、自信に満ちた笑みを浮かべてそう言った。その様子は、まさに覇王…部下が自分を裏切る事など、絶対にあり得ないと言わんばかりだ。

【華琳】
「どうかしら？」

【蒼馬】
「…ふーん。見てて清々しいくらいの自信だねぇ～。おじさんは、さっきも言ったように自由気ままな旅人だから、望み通りに動くとは思わないでおくれよぅ。」

何と、何を考えたのか蒼馬も彼女の申し出を了承…一体、どういう風の吹き回しだろうか？

【蒼馬】
『時空間転移で異世界に出れないなんて…こんな事は初めてだねぇ～。
それに、彼女やさっき会った趙雲ちゃんの名前から察するに、ここはウォルナテーラ…智輝君や日下の坊ちゃんのいる地球の、三国志とかいう時代のハズ…史実では確かみんな男だったと思ったんだけど～。
何にせよ、この世界から脱出するには、まずこの世界について色々と調べないといけないみたいだ。となれば、しばらくはこの世界に溶け込まないといけないからねぇ。』

【華琳】
「…ま！ちょっと、蒼馬！」

【蒼馬】
「え？」

【華琳】
「え？じゃないわよ。さっきから呼んでるのに、全然返事をしないんだもの。」

【蒼馬】
「おや、ごめんよ。おじさん、年のせいか最近どうも耳が遠くて。」

【華琳】
「気になっていたのだけれど、貴方年は？風貌はさておき、二十そこそこだと思うのだけれど？」

訝しむのも無理はない…いくら髭を生やし、みすぼらしい恰好をしていても、まだまだ若々しい様子は隠しきれない。春蘭を小娘よばわりできる年には、誰の目にも見えない。

【蒼馬】
「…君たちの数え方だと…六百前後になるかな？」

華琳は大きな鎌を蒼馬の首に突き付けた。

【華琳】
「ふざけないでと言ったはずよ？」

【蒼馬】
「嘘は言ってないってばぁ。色々と事情があってね…機を見て、おいおい話すよぅ。」

【華琳】
「…はぁ…なら、最後の質問。貴方の真名は？」

【蒼馬】
「真名？それは、さっきから君たちが呼び合ってるやつかい？」

【華琳】
「そうよ。まさか、真名を知らないとでも？」

信じられないという目で、華琳は蒼馬を見下ろした。この世界においては、真名というのは常識らしい。

【華琳】
「真名とは、父母より与えられたもう一つの名前…その者の本質を現し、許可なく他人が口にしてはならない神聖な名前の事よ。」

【蒼馬】
「なるほど…残念だけど、おじさんには真名と呼べるものはないよ。」

【華琳】
「真名が、ない？」

その蒼馬の発言に、華琳は一層のこと信じられないという表情を強くした。それだけ、彼女たちにとって真名は大切なものなのだろう。

【蒼馬】
「蒼馬っていう名前も、おじさんが自分でつけた名前だからねぇ～。それ以外に、名前と呼べるものはないよ。」

【華琳】
「自分で？親は何て貴方を呼んでいたの？」

【蒼馬】
「物心ついた時から、親なんておじさんにはいなかったしねぇ～。」

【華琳】
「そ、そう…それが真実なら、蒼馬という名前が、貴方の真名になるのね。」

【蒼馬】
「ま、そういう事だねぇ～。」

わざと間延びした声で返しているが、華琳も聞いては悪い話を聞いたと自覚しているようで、表情をバツが悪そうに曇らせる…。

【華琳】
「蒼馬、今後は私を華琳と呼んでいいわ。」

【蒼馬】
「おりょ？いいのかい？」

【華琳】
「えぇ。今後の貴方の働き、大いに期待させてもらうわよ。」

こうして、蒼馬は縄を解かれ、華琳たちに連れられて彼女の城へと向かうのだった。

第二話　御遣い、大徳と邂逅する

蒼馬が華琳に拾われた（？）のと同じ頃、

【？？】

「ほらぁ～、二人とも早く早く～！」

別の場所では、もう一つの運命と物語が動きだしていた。

【？？】

「お待ち下さい、桃香様。お一人で先行されるのは危険です。」

先を行くのは、赤い髪に白い羽のついた髪飾りをした女の子…その後ろを、綺麗な黒い髪をポニーテールにした女の子と、虎の髪飾りをつけた小さな少女が追いかけている。

年は、前者の二人が十六前後、少女の方はせいぜい十そこそこといったところか。

【？？】

「そうなのだ。こんなお日様一杯のお昼に、流星が落ちてくるなんて、どう考えてもおかしいのだ。」

【？？】

「鈴々の言う通りです。もしやすると、妖の類いかもしれません。慎重に近付くべきです。」

後を行く二人は、一人で先走り気味の彼女…桃香を窘めつつ先を急いだ。

【桃香】
「そうかなぁ～？……関雲長と張翼徳っていう、すっごい女の子たちがそういうなら、そうなのかもだけど……」

【鈴々】
「お姉ちゃん、鈴々たちを信じるのだ。」

【愛紗】
「そうです。劉玄徳ともあろうお方が、真っ昼間から妖の類いに襲われたとあっては、名折れというだけではすみません。」

どうやら、彼女たちは劉備、関羽、張飛の三兄弟らしい。もっとも、この世界では姉妹だが。蒼馬が出会った三国志の英雄たちも皆、頭に超がつくほどの美少女ばかり…一体、この世界は何なのだろうか？

【桃香】
「うーん……じゃあさ、みんなで一緒に行けば怖くないでしょ？だから、早く行こ♪」

【鈴々】
「はぁ～～～、分かってないのだぁ～～～。」

【愛紗】
「全く。……鈴々、急ぐぞ。」

【鈴々】
「了解なのだ。」

自分たちの意を一向に理解してくれない桃香に、二人は溜め息を吐きつつも、また彼女の後を追って走り出すのだった。

そして、三人は流星が落ちたと思われる辺りにやってきた。

【桃香】
「流星が落ちたのって……この辺りだよね？」

【愛紗】
「私たちが見た流星の軌跡は、五台山の麓に落ちるものでした。我らの目が妖に誑かされていたので無ければ、この辺りでまず間違いは無いでしょう。」

【鈴々】
「だけど、周りには何も無いのだ。……どうなってるのかなー？」

辺りを見回してみても、特に流星が落ちた痕跡はない…もっとも、本当に星が落ちてきていたら、とっくに彼女たちは吹き飛ばされていただろう。

【桃香】
「みんなで手分けして、流星が落ちたところを探してみよっか？」

…どうやらこの桃香という彼女、かなりお気楽というか、いわゆる楽観主義者らしい…。

【愛紗】
「それは危険です。未だ善なるか悪なるか分からない代物なのですから。」

【桃香】
「ならみんなで一緒に探すしかないかー……」

【鈴々】
「そうするのだ。……って、あにゃ？あんなとこに人が倒れてるのだ！」

張飛…鈴々と呼ばれる少女が、何かを見つけ駆けだした。その先には、白い服を着た人が倒れている…。

【桃香】
「えっ？あ、ちょっと、鈴々ちゃん！」

すぐに後を追う桃香…

【愛紗】
「ちょっ……！まったく！二人ともどうしてああも猪突なのだ！」

何となく、この三人の人となりというか、キャラクターが分かってきた…それと同時に、気苦労の絶えなそうな関羽には、同情を禁じ得ない。…頑張れ、関羽！

【鈴々】
「あやー……変なのがいるよー？」

一番に駆け寄った鈴々の第一声は、かなり失礼なものだった。
その後ろから、桃香と関羽の二人も追いつき、それぞれに倒れているその人物を観察した。

【桃香】

「男の人だね。私と同じぐらいの歳かなぁ？」

【愛紗】
「二人とも離れて。まだこの者が何者か分かっていないのですから。」

全く警戒心の無い桃香と鈴々…対し、関羽は冷静だ。
というか、一緒にいるこの子たちがこの様子だ。一人で三人分の警戒心を発揮しなければならないのだから、そりゃあ大変だろう。

【鈴々】
「でも、危ない感じはしないのだ。」

【桃香】
「ねー。気持ちよさそうに寝てるし。見るからに悪者ーって感じはしないよ？愛紗ちゃん。」

二人の言うとおり、静かな寝息をたてるその少年は、優しげで人好きのする顔立ちをしていた。しかし、関羽…改め、愛紗は

【愛紗】
「人を見た目で判断するのは危険です。」

その程度の事で、警戒を解く気にはなれなかった。
もとより、どんな悪ガキでさえ、寝顔は可愛いものだ。当てにはなるまい。

【愛紗】
「特に、乱世の兆しが見え始めた昨今、このようなところで寝ている輩を――――」

【？？】
「ん……」

愛紗がさらに言葉を続けると、さすがに五月蝿かったのだろうか？
少年は小さな声を漏らしながら身じろぎした。

【愛紗】
「っ！桃香様、下がって！」

【桃香】
「え？わわっ？」

【鈴々】
「おー、このお兄ちゃん、起きそうだよー。へへー、つんつん……」

愛紗は即座に、桃香を自分の背後に下がらせる。
しかし、相変わらず警戒心のない鈴々は、少年の頬をつつき始めた。

【愛紗】
「こら、鈴々！」

【？？】
「んん……」

【愛紗】
「……っ！」

【？？】
「……」

一瞬、目を覚ますかと思われた少年だが、再びその寝息はゆったりしたリズムを刻み始めた。

【愛紗】
「くっ……脅かしよって……」

【桃香&鈴々】
「「……」」

一人で警戒を強めていた愛紗に、桃香と鈴々は何やらニヤニヤした顔を向ける。

【愛紗】
「な、なんです二人とも。私の顔に何かついているのですか?」

【桃香】
「あー……愛紗ちゃん、もしかして怖いのかな?」

【愛紗】
「……そんなこと、あるわけがありません!」

【桃香】
「ふーん……」

【愛紗】
「な、なんですか?その『やっぱり怖いんだー』とでも言いたげな笑いは!」

などと、愛紗が大声を出していると…

【??】
「……ん、ん…」

あまりの煩さに堪えかねたのか、少年はやっと目を覚ました。

【??】
「……んん?」

眠そうな彼の瞳が、三人の姿を捉える…それだけで、冷水で顔を洗うよりしっかり目が覚めた様子で、慌てて周囲の状況を確認し始めた。
目の前にいる三人からは、害意を感じない。とびっきりの美少女たちだという事は一目で分かったが、そんな事は考慮を優先すべき事項でも何でもないわけで…彼にとっては目下の所、

【??】
「……ここ、何処だ?」

とにかく自分のおかれている現状…現在地の把握こそ急務であった。なにしろ、周囲を見回しても、見慣れた風景の影も形もないのだから。

【桃香】
「あ、あのぉ〜…」

【??】
「…?」

頭を抱えるしかない少年に、桃香がおずおずと声を掛けてきた。

【桃香】
「えーっと、大丈夫ですか？」
心底心配そうに尋ねる彼女の瞳に、少年は思わず見入ってしまった。澄んだエメラルド色の瞳は、ともすれば吸い込まれてしまいそうだ。
【？？】
「だ、大丈夫。心配してくれてありがとう。」
慌てて立ち上がり、何処もケガが無いことを示しながら、少年は礼を言った。
【桃香】
「ホッ。良かったぁ～♪」
桃香が笑顔を浮かべた瞬間、目に見えない不可思議な力が辺りに迸った。
それは、華琳の持つ王の覇気と、似て非なるもの…。
【桃香】
「ねぇねぇ、お兄さん。どうしてこんな所で寝てたの？」
桃香のその質問は、至極当然のものだった。
【？？】
「え？あ、いや…ゴメン、分からないんだ。夕べは学園内にある歴史資料館から、銅鏡を盗み出した泥棒を捕まえようとしてて…そしたら何か、知らないおっさんも乱入してきて…結局、その鏡を落としちまったんだ。そしたら、割れた鏡が急に光り出して……その光

に包まれたところで、意識を失っちまった。」

【愛紗】
「そして、気付いたらここで倒れていたと、そういう事でしょうか？」

【？？】
「うん…」

と、三人が話している横で、鈴々は少年の服をじっと見つめていた。

【鈴々】
「お兄ちゃんの服、変わってるのだぁ。キラキラしてて、何だかお日様みたいなのだ。」

【？？】
「え、あぁ…学園の制服で、ポリエステルとか使ってるからね。そんなに珍しいものじゃ…」

【鈴々】
「ぽーり、えすてーる？何なのだ、それ？」

思いもかけない質問に、少年は戸惑った…何しろ、彼は現状を全く把握できていないままなのだ。ここが、中国の三国時代を模したパラレルワールドのような世界だという事も、当然ながらポリエステルなんて化学繊維が、この世界には存在もしていないという事実も…何一つ知るはずがないのである。

【桃香】
「やっぱり…思った通りだよ、愛紗ちゃん！鈴々ちゃん！」

何が思った通りなのか？
ついていけずに首を傾げる少年をよそに、桃香は嬉しそうだ。

【桃香】
「このお兄さんが、管輅ちゃんの言ってた天の御遣い様だよ！」

【？？】
「は？天の御遣いって？」

【愛紗】
「この乱世に、平和をもたらすとされる天の使者の事です。」

愛紗が説明してくれた。
何でも、東方より飛来する流星に乗って、天の御遣いが現れると、
その管輅なる占い師が予言したそうだ。

【？？】
「なるほど…その占いを信じて、その流星とやらが落ちたと思しき場所、つまりここに駆けつけてみたら、俺が大いびきをかいて寝ていたわけだ。」

【桃香】
「そういう事♪あ、でも、そんなに煩くなかったよ。」

【？？】
「そりゃどうも…」

【桃香】
「寝顔も可愛いかったしね♪」

【鈴々】
「ほっぺたプニプニしてたのだ♪」

【？？】
「いや、可愛いって…俺、男だし…それに君たちほどじゃないだろ。」

本来なら、言うのにかなり勇気がいりそうなセリフを、さらっと口にした少年。
しかし、可愛いなどと言われた気恥ずかしさから、照れ隠しに言ったのだろう…あまり気障な印象にはならなかった。おかげで…

【桃香】
「え？えへへ、ありがとう♪」

【鈴々】
「にはは、照れるのだ♪」

…桃香と鈴々の好感度が、それぞれ1上がった。しかし、愛紗の好感度だけが何故か1ポイント減少してしまった。

【愛紗】
「んんっ！二人とも、可愛いなどと言われて浮かれてる場合ですか？」

どうやら、自分だけ『可愛い』の対象から外れていると思い込んだのだろう。

【桃香】

「あぁっ、そうだった！ねぇお兄さん、お兄さんの持つ天の力…乱世を鎮める力を貸して欲しいの！」

【？？】
「え？」

【桃香】
「お願い！」

桃香は彼に縋り、必死な様子で協力を求めた。おそらく、その豊満な胸を彼に押し付けている自覚も無いほどに…。

【？？】
「あの…とりあえず、離れてくれる？」

少年は顔を赤らめながらも、紳士的な行動に努めようとした。

【桃香】
「あ、ごめんなさい…でも、どうしても私たちには、お兄さんの協力が必要なんです。」

【愛紗】
「今や、漢王朝は衰退し、政治は腐敗しています。各地では賊が出没し、力無い民たちが襲われているのです。」

【鈴々】
「役人は、高い税金ばかりとって、ろくにお仕事もしないから、尚更なのだ。」

【桃香】

「そんな乱れた世を憂い、困っている人たちを助ける為に、私たちは立ち上がりました。皆が、笑顔で暮らせる世界を創る為に…でも、私たち三人だけじゃ、どうにもならない…手の届く範囲にいる人たちすら、守りきれない…救いきれない……。それが、現実でした…だから、御遣い様の力を貸して欲しいんです。皆が笑顔でいられる、優しい世界を創る為に…」

桃香の語る世界、それは言葉だけの絵空事だ…皆が笑顔でいられる、そんな世界は有り得ないのだから。
世界は、非情だ…人が思っているより、ずっと…。誰かが１０の幸福を得たなら、他の誰かがその分の不幸を味わう…これは絶対だ。
そこに直接の因果が有ろうと無かろうと、世界はそうなっているのだ。
しかし、彼女を見ていると、本当にそんな幸せな世界が、未来が見えてくる…ただの夢物語なんかじゃないと、そんな気がしてくるから不思議だ。しかし、

【??】
「ゴメン…俺には、乱世を鎮める力なんて無いよ…君たちの力には、なれない…」

【桃香】
「そんな！そんな筈ない！だって、お兄さんは流星に乗って現れて、こんなにキラキラした服だって着てる…お兄さんこそ、天の御遣い様に間違いないよ！」

【??】
「俺は、しがないただの学生だよ…何の力も、取り柄もない…」
泣きながら少年に縋る桃華…だが、彼は申し訳なさそうに顔を歪め

るしかなかった。

【愛紗】
「桃華様、あまり無理を言われては…」

【桃香】
「でも、このままじゃ…」

【愛紗】
「大丈夫です、私と鈴々で賊どもなど蹴散らしてみせます。」

【鈴々】
「そうなのだ。」

【??】
「何の話?」

一人蚊帳の外に放り出されては、さすがに居た堪れないので訊ねると…

【愛紗】
「この近くの町に、最近よく賊が出没するのです。しかも、その町が属する領地の太守は、民を守るどころか、兵を連れて逃げてしまったのです。町の者たちは賊に襲われても、どうすることも出来ません。そんな彼らを助けようと思ったのですが、聞けば相手の賊は数も多く、こちらも義勇兵を募る必要がありました。しかし、無名な我らの檄に、応えてくれる者たちは少なく、多勢に無勢…ですが、この戦いこそが正義。我らは負けません。」

【鈴々】

「そうなのだ。賊なんて、鈴々がズバババッとやっつけてやるのだぁー！」

【桃香】
「私たち、もう行きますね…もし、旅の空で私たちの噂を聞いたら、その時は応援して下さいね。」

三人は、少年を残しその場を去ろうとした。

【？？】
「……待ってくれ。」

何を思ったか、少年は三人を呼び止めた。
何故、そんな事をしたのか…わざわざ自分から、面倒事に首を突っ込むようなマネをしたのか…理由は分からない。しかし、陳腐な言い方だが、きっとそれは運命だったのだろう。

【一刀】
「俺の名は、北郷　一刀。さっきも言ったように、何の力もないし、大した取り柄もない。それでも、天の御遣いだなんてマユツバな肩書きだけでも、役に立てるっていうなら、使ってやってくれないか？」

【桃香】
「え？でも…」

【一刀】
「いや、ほら…俺も行く当て無いしさ、やっぱり困ってる女の子をほっとくわけにいかないし…。だから、持ちつ持たれつって事で。」

少年、一刀は笑顔でそう言った。未だ、自分の置かれている現状を把握しきれていないだろうに、そんな不安や迷いを些細な事のように捨て置き、彼は自らの運命の扉を、自分自身の手で押し開けたのだった。

一刀好感度
桃華１→２（＋１）
愛紗１→０（－１）
鈴々１→２（＋１）

第三話　御遣い、王の片鱗を見せる

【一刀】
「ど、どうなってんだ？これ…」

町へとたどり着いた一刀の第一声…まぁ、誰もがそう口にするだろう。
隣にいる愛紗も桃香も、言葉を失っている。それほどに、町は無残な姿をしていた。
あちこちで火の手が上がり、ほとんどの家や店は外装も中身もメチャクチャにされていた。

【桃香】
「私たちがご主人様を探しに出てから、ほんの一刻くらいなのに…」

桃香は青い顔をして、口元を押さえ立ちすくんでいた。

【愛紗】
「大丈夫ですか、桃香様？」

愛紗が、今にも倒れそうな桃香を背中から支えてあげた。

【一刀】
「…ここで突っ立っててもしかたない。二人とも、ケガをした人がいないか、町の人たちの様子を見てきてくれ。俺は鈴々を探して事情を聞いてくる。」

【愛紗】
「わ、分かりました。」

愛紗と桃香の二人と別れ、先に町に戻っていたはずの鈴々を探す一刀。

【一刀】
「鈴々っ！鈴々っ、何処だ！」

【鈴々】
「お兄ちゃん…」

程なくして、鈴々は見つかった。

【一刀】
「鈴々…ケガは、無いみたいだな。でも一体何があったんだ？」

【鈴々】
「それが…」

鈴々が悲しげに、悔しげに顔を歪ませる…虎の髪飾りまで、何だかしょんぼりした様子だ。

【鈴々】
「鈴々が町に着く少し前に、例の賊たちが襲ってきたんだって…」

【一刀】
「そうか…」

それを聞き、一刀も悔しさに胸を締め付けられた。
同時に、理解もした…今まで、彼女たちが味わってきた悲しみ…そして、悔しさを…。

【鈴々】
「動ける人は、みんな酒家に集まってるのだ。」

【一刀】
「分かった。なら、愛紗や桃香と合流しよう。急ぐぞ…のんびりしてると、せっかくの逆襲のチャンス、いや機会を失っちまうからな。」

【鈴々】
「ほえ？」

鈴々には、一刀の考えている事がよく分かっていないようだ。だが、ここで説明している暇はない。二人はすぐに愛紗たちと合流し、皆が集まる酒家へと向かった。

酒家の中には、町の人が大勢集まっていた…ケガをして包帯を巻く人や、煤塗れになった人たちが、力無く座り込んでいる…。

【桃香】
「み、皆さん！大丈夫ですか？」

そんな町の人々を見て、真っ先に声を掛けたのは桃香だった。
皆の事を心から心配し、労る桃香の姿に、失意に染まっていた町の者たちの瞳も、幾分か光を取り戻したようだった。

【一刀】
「…愛紗。」

【愛紗】
「はっ！如何なされましたか、ご主人様？」

【一刀】
「皆を鼓舞する。フォロー…いや、補佐を頼めるかな？」

【愛紗】
「はいっ！」

【一刀】
「皆っ！聞いて欲しい事がある！」

一刀は声を張り上げ、隅に居る人にまで聞こえるよう話し出した。

【村人A】
「あんたは？」

【愛紗】
「この方は、乱世を鎮め、皆を救うために天より遣わされた、天の御遣い様だ。」

愛紗の言葉に、町の者たちは様々な反応を示した。
一刀の服を見て信じる者…弱そうで頼りないと信じぬ者…イイ男だからそれでいいやと思う女性陣…。愛紗の好感度がダウン…する分がなかった。

【一刀】
「俺が何者だろうと関係ない。皆にとって重要なのは、今がまさに好機だという事実…賊どもは今頃、奪った食料や酒で祝宴でも開い

ている事だろう。そこへ、今度はこちらから仕掛ければ…皆の受けた屈辱、怒りと共に返せるだろう。」

一刀の考えていたのは、こういう事だったようだ。
奪われた事を嘆くより、敢えて利用しようと機転を働かせたのである。だが…

【村人B】
「そんな事言ったって、相手は何千人もいるんだぞ？俺たちだけで、どうしろってんだ？」

【村人C】
「勝てるわけがねぇよ！こっちは千人集まればマシってくらいなんだぞ？」

弱気な町の若者たちの言葉に、一刀は眉間にシワを寄せ、一段と声を荒げた。

【一刀】
「なら、どうする？皆で尻尾を巻いて逃げるのか？足腰の弱い老人や女子供が、お前たちと等しく逃げられると思うか？」

【村人C】
「それは…」

【一刀】
「死ぬのが怖いのは当たり前だ。だからこそ、生きるために、守るために戦う事を恐れるなっ！」

いつの間にか、一刀の言に誰もが聞き入っていた。町の者も…桃香

も…鈴々も…愛紗も…。
信じられない事だが…どうやら彼も、王の覇気を有しているようだ。華琳には及ばないが、潜在的な部分はまだまだ計り知れない…先行きが楽しみな少年である。

【一刀】
「皆の大切なものは、ここにあるんだろう？」

最後に、優しく問うように語りかける…その言葉は、驚くほど自然に、皆の心に染みいくのだった。

【村人B】
「…そうだ…ここは、俺たちが生まれ育った町だ！」

【村人D】
「俺たちの爺さん婆さんが、汗水流して創り上げた町だ！」

【村人E】
「あんな奴らに、これ以上好き勝手されてたまるか！」

一刀の呼び掛けに応え、男たちが続々と立ち上がる…失意に濡れた瞳を揺らす者は、もう一人もいなかった。その目に宿るのは…闘志と決意。

【村人A】
「俺は、町中の男たちに声を掛けてくる！」

【村人B】
「なら、俺たちは武器になりそうな物を集めてくるぜ。」

【村人C】
「そいじゃあ、俺は…えーと？」

他の皆に続いて飛び出して行こうとした若者だったが、何をすればいいのか分からず首を傾げた。

【一刀】
「傷薬や、役に立ちそうな道具が欲しい。お願い出来るかな？」

【村人C】
「合点だ。」

一刀に指示され、若者も駆けて行った。

【一刀】
「後は…この町の長はどちらに？」

【長老】
「あぁ、わたくしですじゃ…」

名乗り出たのは、白いひげを生やした見るからに高齢のお爺さんだった。

【一刀】
「町を襲った盗賊の数は、どれくらいでしたか？」

【長老】
「えー、確か奴らは…およそ四千ほどだったかと。」

【一刀】

「対し、こっちは千人前後…奇襲だけじゃあ、心許ないか。」

一刀は再度、思案を巡らせる。
祖父の家で読んだ兵法書に書かれていた事を、懸命に思い出していく。

【一刀】
「…そうだ、地の利！お爺さん、この町と盗賊どものねぐら周辺の地形を知りたい。地図はありませんか？無ければ、誰か詳しい人を紹介して欲しいのですが。」

【長老】
「地図なら、わたくしの家に有ったハズですじゃ。」

【一刀】
「お借り出来ますか？」

【長老】
「はい、すぐに。」

町長はすぐさま家に向かった。

【桃香】
「さっすがご主人様♪」

【鈴々】
「やっぱり、お兄ちゃんは天の御遣い様なのだ♪」

桃香と鈴々の好感度が、ぐーんと上がった。

【一刀】
「そんな大した事じゃないよ…それに、確実に勝つためにはもう一押し、何か策が必要だ。」
一刀はそう言って、外へと足を向けた。

【一刀】
「少し、外の空気を吸ってくる。」
表に出た一刀は、建物の陰に回って、壁に凭れかかった。
その肩や腕、膝は小刻みに震えていた。

【一刀】
「……はぁーっ、緊張したぁ～。」
深いため息を吐く彼からは、さっきのような王の覇気は感じられない。

【愛紗】
「ご主人様？」

【一刀】
「え？」
声を掛けられ、思わずドキッとする一刀…ビクッの方が正しいかも知れない。
振り向くと、そこには心配そうな顔をした愛紗が立っていた。

【愛紗】
「どうかされたのですか？顔色が優れないようですが…」

【一刀】
「な、何でもないよ！これからが本番なんだからさ。」
そう言い、一刀は愛紗の肩にポンと手を置いた…その手は、隠しようもない程に震えていた。

【愛紗】
「…っ。」

【一刀】
「戻ろう。町長さんも戻ってくる頃だ…具体的な作戦も立てないといけないしね。」

その一刀の震えに、愛紗は彼の言葉の意味を、今更ながら正しく理解した。
自分は、天の御遣いなんかじゃない…その通りだ。彼だって、普通の人間なのだ…死ぬのは怖いし、独りぼっちは寂しいし、大切な家族や故郷だって在る。
しかし、そんな彼は今、右も左も分からない異世界にいるのだ…それは言ってみれば、迷子のようなものだ。いや、どんなに探しても、親はおろか知り合いの一人とも会えないのだから、迷子の方がよほどマシである。
そんな状況にある彼に対し、自分は何を強いているのだろうか？民を救う？乱世を鎮める？そんな期待ばかり押し付けて…もし彼が、期待に応えてくれなかったら…失望し、見限るのだろうか。
…否定したくとも、その答えは既に示していた…。

【愛紗】
「…っ！」

自分の信じていた世界を奪われた彼を、頼る者もおらず心細かったであろう彼を…真名の事すら知らなかった、この世界について無知過ぎる彼を……荒野に置き捨てようとしていたのだから。

【愛紗】
「ご主人様…」

これから先も、ずっとそうなのだろうか？
だとしたら、彼はあまりに…あまりに、孤独ではないか。

【一刀】
「愛紗。」

【愛紗】
「っ、はい！」

【一刀】
「ほら、ぼぅっとしてると置いてくぞ？」

それでも、笑顔でいようとする彼を、人として支えて行こうと…愛紗は決意を改めるのだった。
…おや？愛紗の好感度の様子が……おめでとう！愛紗の好感度が愛情度に進化した。

一刻ほど過ぎた頃には、町中の男たちが酒家の前に集まっていた。
その集団の前に立つのは、桃香、愛紗、鈴々の三姉妹と、天の御遣いこと一刀であった。

【一刀】
「皆、よく集まってくれた。時間が無いので手短に説明する。今回、奇襲とは別に、もう一つ策を用いる。まず、半分の六百人ずつ、二つの部隊に分かれる。奇襲部隊と、伏兵部隊だ。指揮を採るのは、伏兵部隊が関羽将軍と劉備将軍。奇襲部隊は張飛将軍と、この俺、北郷　一刀が率いる。細かい作戦の内容は、各将軍に伝えてあるので、その指示に従ってくれ。各々の役目を果たし、皆で勝利を掴もう。」

大雑把な説明が終わったところで、一刀は己の得物である木刀を、天に掲げた。
そして、再び瞳に王の覇気を宿す…恐らくまだ、その自覚はなく、無意識なのだろうが…。

【一刀】
「我は天の御遣い也っ！聞けぃっ、戦場に赴く勇士たちよ！皆の命、この北郷　一刀が預かる！大切なものを踏みにじられる痛みを、悲しみを、その恐怖を胸に刻め！臆せば死に、逃げれば何も守れぬぞ！守り抜け！守るために戦え！生きて帰り、愛する者をその手に抱く為に！」

一刀の檄に、皆の士気は最高潮に達した。

【村人たち】
「「「「「オォーーーーーーーッ！」」」」」

【一刀】
「時は来た。全軍、進めぇっ！」

【一刀】
『…信じられない…俺、一体どうしちまったんだ？』
一刀と鈴々率いる奇襲部隊は、追ってくる盗賊たちから懸命に逃げていた。もっとも、これも作戦の内だが…。
一刀の作戦は、ここまで完璧に進んでいた。想定外だとするなら、思っていた以上に多くの敵数を削れた事だ。
現在、一刀と鈴々が率いる部隊は４００前後…負傷者と、捕まっていた町の娘たちを帰すために、５０人ほど兵を割いてこの数字だ。
対し、盗賊たちはすでに…２０００を下回っていた。

【鈴々】
「お兄ちゃん、凄いのだ♪一人であんなにやっつけちゃうなんて…」
そう…全ては、一刀の予想外の戦闘力が原因だった。
倒した盗賊の数…およそ５００人。これは、鈴々とほぼ互角の数字だ。

【一刀】
『あれだけ戦って、息一つ乱れないなんて…』
嬉しい誤算…と、楽観的にはなれなかった。自分の身に起きている変化に、自分が自分でなくなってしまいそうな、そんな不安すら覚え始める一刀…。

【鈴々】
「どうしたのだ、お兄ちゃん？さっきから難しい顔して…」

【一刀】
「え？あ、いや…何か、次の作戦あんま必要なかったかなぁ～って思っただけだよ。」

そう言って誤魔化す一刀だが…すでに目的地に着いてしまっていた。そこは…狭い谷路、峡間だった。町長から借りた地図で見つけたのである。

ガラッ　パラパラっ

側面の絶壁を滑る、砂のように細かい石…しかし、盗賊たちは誰一人その予兆に気づかない。

【桃香】
「みんなー、せーのっ！」

桃香の掛け声と共に、何本もの丸太が一斉に落とされた。

【賊A】
「ぎゃあーっ！頭ぁっ！大変ですっ！」

【賊B】
「な、何だぁっ！？」

【賊C】
「お、おい！早く行けよ！」

【賊D】
「押すなって…うわあああああっ！」

ドンッ　ドドーン…

多くの盗賊たちが、丸太の下敷きになってしまった。
しかし、それだけではない…この丸太には、

【賊E】
「何だ、この丸太？油くせぇ…」

たっぷりと、油が塗られていたのだ。この油は、一刀に指示されて薬や道具類を調達に行った、村人Cが用意してくれたものだ。

【一刀】
「よし！愛紗っ！」

一刀が叫ぶと、今度は反対側から火矢が…油塗れの丸太に降ってきた。

ゴオオォォッ

【賊E】
「ぎゃあーっ！」

【賊F】
「火！火が、火がぁっ！」

一瞬の内に、盗賊の群れは火の海に飲み込まれた。
こうなっては、盗賊たちに為す術はない。

【賊G】
「畜生っ！どけぇっ！」

【賊H】
「うわあああっ！」

【賊I】
「邪魔だ！俺が先だっ！」

皆、自分が先に逃げたいからと、仲間同士で押し退けあい、足を引っ張りあう始末…。

【一刀】
「今だ！総員、盗賊たちを蹴散らせぇっ！」

【鈴々】
「鈴々に続くのだーっ！」

奇襲部隊は、素早く反転し、盗賊の群れの前方部隊に突撃した。

【愛紗】
「桃香様！」

【桃香】
「あ、愛紗ちゃん。お疲れ様♪」

６００から更に分断された、愛紗と桃華のそれぞれの部隊は、一刀たちとは逆側で合流した。

【愛紗】
「皆、あと一息だ。炎で分断された盗賊たちの、我らは後方部隊を叩く。」

【桃香】
「よーし！皆、頑張ろうね。」

そしてこちらも、勢いよく突撃を敢行した。

あっという間に、盗賊は全滅した。それはすなわち、一つの町に平和が戻ったという事を意味する。
その日、町はまるで祭のような騒ぎだった。
町に戻ってから被害の確認をしてみると、軽傷者が１８７名、重傷者が７６名だった。
死者…０名…。
それはもう、奇跡という言葉すら、安っぽく感じるような結果だ。

【桃香】
「やったね、ご主人様♪」

【鈴々】
「お兄ちゃん！今度、鈴々と勝負して欲しいのだ！」

桃香と鈴々は相変わらずお気楽な様子で、一刀の両脇でわいわいはしゃいでいる。
まぁ、今日ぐらい、思う存分はしゃがせて上げてもいいだろう。

【一刀】
「あ、あぁ…いいけど、お手柔らかに頼むよ？」

【鈴々】

「それは出来ないのだ。武人として無礼なのだ。」

【一刀】
「いや、そもそも俺は武将じゃな…」

【愛紗】
「こら、鈴々！あまり無茶を言って、ご主人様を困らせるな。」

愛紗がすかさず助け船を出した。
が、それを見た桃香が、何やらにんまりとした笑みを浮かべ、愛紗の背後に回り込んだ。

【桃香】
「あれれ～？愛紗ちゃ～ん、ひょっとしてヤキモチ？」

【愛紗】
「んなっ！」

背後をとられた事もそうだが、その発言にこそ愛紗は動揺していた。
それこそが、真実を如実に表していたのだが、この時の愛紗にはまだ、その自覚は無かったのである。

【桃香】
「だ、だ、誰がヤキモチなど！」

【鈴々】
「にはは♪愛紗、お顔が真っ赤なのだぁ♪」

鈴々まで加わって、愛紗をからかう始末だ。
しかし、そんな賑やかな空気の中でも、一刀はずっと難しい顔で、

握ったり開いたりを繰り返す自身の右手を見つめていた。

一刀好感度
桃華２→４（＋２）
鈴々２→４（＋２）

愛情度
愛紗１→１．１

第四話　魏武の大剣、死神に挑む

蒼馬が、華琳こと魏の曹操（今は陳留の刺史）の部下になった翌日…宛がわれた部屋で、彼は惰眠を貪っていた。

【蒼馬】
「うーん…布団で寝るなんて、久しぶりだねぇ～♪」

と言って眠りに就いた昨夜から、すでに半日が経過していた…すっかり布団の住人と化しているが、あまり寝てばかりだと脳みそが溶け出してくるんじゃなかろうか？ただでさえ中身のユルそうな男だし、十分に有り得る。

【蒼馬】
「ん、んーっ…」

大きく伸びをして、蒼馬はむくりと起き上がった。と同時に、部屋のドアが開かれる。

【華琳】
「あら、起きていたのね。」

入って来たのは、この城の主である華琳だ。
金髪のツインテールをカールさせた、特徴的な髪型をしている。髪留めが髑髏を模したデザインなのも、かなり柔らかい言い方をすれば個性的と言えるだろう。紺と紫色の服は、趙雲が着ていた着物のように胸元が開いており、気持ちばかりの谷間を見せつけている。
年相応に見えるのは、背丈とそれくらいのものだろう。
瞳に宿す覇気、立ち居振る舞いや威厳、物言い…全てにおいて、一

介の少女のそれを遥かに凌駕している。人界の覇王が一人、曹孟徳の名を冠するに相応しい…。

【蒼馬】
「やぁ。おはよう、華琳ちゃん。」

【華琳】
「その呼び方は止めて欲しいわね。それに、おはようと言うには、明らかに遅い時間なのだけれど？」

少し機嫌を損ねた様子で、華琳は蒼馬を睨みつける。

【蒼馬】
「自分で真名を預けてくれたのに、随分な言い草じゃないか。」

【華琳】
「そうじゃなくて、ちゃん付けが嫌なのよ。」

【蒼馬】
「いいじゃない、そっちの方が可愛いでしょう？」

セクハラ発言だ。

【華琳】
「可愛い、可愛くないの問題じゃないわ。兵の士気にも関わるし、他の部下に示しがつかないの。わたしの顔を潰すつもり？」

【蒼馬】
「言ったでしょう？おじさん、これでも気が遠くなるほど長く生きてるって。君なんて、おじさんからしたら赤子も同然さ。」

【華琳】
「なっ！誰が赤子ですって？我は曹も…」

【蒼馬】
「体裁やプライドにこだわるのは、若い証拠さ。」

寝台から立ち上がった蒼馬は、怒り心頭の華琳を置いて部屋を出て行った。

【華琳】
「ま、待ちなさい！まだ話は…って、あら？」

すぐに華琳も後を追ったが、すでに蒼馬の姿は無かった。
空間転移で移動したのだろうが、まだ蒼馬の…神術師の能力を知らない華琳にとっては、思わず身震いするほどの事態だった。

【華琳】
「蒼馬…本当に、何者なのかしら？」

引き入れたのは自身の判断だが、その判断に早くも後悔…とまではいかないが、不安を覚える華琳。
それに、未だ彼の事を何も知らない現状に、焦りに似たものも感じていた。

【華琳】
「くっ…この曹孟徳が、部下の一人も飼い馴らす事が出来ないなんて、悪い冗談だわ。見てなさい、蒼馬…必ず貴方を、わたしの前に跪ずかせてあげるわ。」

空間転移で城を出た蒼馬は、近くの野山に流れる小川に来ていた。
小川とは言え、小さいながらも滝まである立派な川だ。

【蒼馬】
「水浴びに最適だねぇ～。」

そう言って、蒼馬は着ているボロ服を脱ぎさって水の中に入った。
冷たい川の水が足首を撫でていく…さらに深い所まで行き、蒼馬は全身を水に浸からせた。頭まで浸かり、彼のムダに長い髪だけが水面に浮いて、その位置を知らせるのみ。
…さて、そのまま5分近くが経過した。その間、蒼馬が息継ぎをした形跡はない…どういうつもりか知らないが、どうやら入水自殺したようだ。

ザバァンッ

大きく水を撥ね、豪快な水音を鳴らし、蒼馬が水中から現れた。上半身を反らし、いつの間にか解けた長い髪が、多量の水ごと弧を描いて、彼の背中と水面へと叩きつけられる…飛び散る飛沫が陽光を浴びて煌めき、光景そのものはとても美しかった。その中心が、ヒゲ面のむっさいオッサンの裸じゃなく、美女か美男子の裸体ならば、そのまま絵になっただろうに…。

【蒼馬】
「ふぅーぃ…気持ちいいねぇ♪と、せっかくだし…」

蒼馬は人差し指を立てて、その指先に向けて神通力を僅かに込める。

【蒼馬】
「セイバー」

爪の先から、長さ5センチの細長い光の刃が出現した。
これは神技（じんぎ）という、神術師にとっては基礎的な技のうちの一つである。
それを使って、蒼馬は自分の顔に生えた髭を、ジョリジョリと剃り始めた。
しかし、簡単故に使い勝手がいいのは事実だが、主に戦闘で使用する神技を、出力を抑えて剃刀代わりに使うとは…器用だが貧乏臭い…。

【蒼馬】
「まぁ、こんなもんかなぁ～？」

水面に映る自身の顔を見て、蒼馬は一人納得気にうんうんと頷いた。
他に答えてくれる者がいないので、そうしないと寂しいのだろう。
と、今まで背を向けていた蒼馬がこっちを振り返り、水から上がって、き……誰っ？
一瞬、本気で彼と蒼馬が同一人物だとは思えず、叫びそうになった。
水浴びを終えた彼は、髭もなくなりサッパリとした男前に様変わりしていたのだ。水も滴る何とやらとは、よく言ったものである。
その後、服を着た蒼馬は来た時同様、空間転移で川辺を後にしたのだった。

蒼馬が部屋に戻ると、寝台の上に一組の服が置かれていた。この世界の服…というか、華琳の率いている軍の兵士が着ていた服と鎧だった。

【蒼馬】
「へぇ～、気が利くじゃないか♪」
早速、その服に着替えた蒼馬…ボロ服の防御力が＋1なら、＋5と言ったところだろうか。どちらにしろ、あまり意味が無い気がするが…。

【蒼馬】
「さて、と…暇潰しに、何か手伝ってあげようかね～。」
そう言って、蒼馬がまず向かったのは、城の中庭だ。そこでは、長い黒髪の女性が大きな黒刀を振り回していた。赤いチャイナドレスの裾から覗く太ももが、実にセクシーだ。だが、凡人ならそれ以前に、彼女の身体能力の高さに、ただただ呆然とするしかないだろうが。
彼女の名は春蘭…魏武の大剣、夏侯惇将軍である。

【蒼馬】
「さすが、いい太刀筋だねぇ。春蘭ちゃん。」

【春蘭】
「でぇぇぇいっ！」

ブォンッ　ズガンッ

振り切られた大剣は、壁に深々とめり込んでしまった。というか、今のは明らかに蒼馬の首を狙っていたようだが…彼が一歩引いてなければ、再び彼女の剣撃がその首に叩きつけられていただろう。

【春蘭】
「おのれ、蒼馬！昨日はよく、も…む、誰だ？」
思いきり斬り掛かってから！？

【蒼馬】
「大丈夫、おじさんで合ってるよぉ～♪」

【春蘭】
「バカを言うなっ！貴様の何処が、髭を生やし放題で見るからにみすぼらしい姿をしたあの男なのだ！まるきり入りたての新兵ではないか！若いし、軍用の服も真新しいし…」
はっきりみすぼらしいと言われた蒼馬だが、別にショックを受けた様子はなかった。

【蒼馬】
「あぁ、これね～。なんか水浴びから帰ってきたら、寝台の上に置かれてて…誰が用意してくれたのかな～？」

【春蘭】
「貴様、本当に蒼馬なのか？」
特徴的な喋り方や声で、やっと春蘭も納得してくれたらしい。そもそも、わざとらしく間延びした喋り方は、本当に地なのだろうか？

【蒼馬】
「ところで、春蘭ちゃんは鍛練中かい？」

【春蘭】

「あぁ、華琳様のお役に立つ為、日々精進を怠るわけにはいかんからな。」

【蒼馬】
「立派だねぇ～。まだ若いのに、直向きに努力する事を厭わないか。おじさん感激しちゃったよ～。」

【春蘭】
「ん、そんなに褒められると照れるではないか…」

春蘭は少し頬を赤らめながら、素直に蒼馬の言葉を受け取った。話し方のせいで、何だかバカにしているように聞こえるが…。

【蒼馬】
「それじゃあ、ちょっと手伝ってあげようかなぁ？」

【春蘭】
「何？」

蒼馬はおもむろに後ろで手を組んで、無防備に構えた。

【蒼馬】
「かかっておいで。」

【春蘭】
「フン、貴様に手伝ってもらわずとも、この夏侯元穣…己の鍛え方ぐらい熟知して…」

【蒼馬】
「うーん…残念だけど、今の鍛練方法じゃあ、君はそれ以上強くは

なれないよぉ～。」

きっぱりと、蒼馬は言い放った。およそ、誰もが分かるであろう禁句を…。春蘭の逆鱗を、彼は平気で逆撫でした。

【春蘭】

「なっ！私が、これ以上強くなれないだとっ！」

【蒼馬】

「さっきの鍛練を、見る限りじゃねぇ。」

【春蘭】

「ふ、ふざけるなぁっ！」

春蘭は逆上し、壁に刺さったままの剣を力任せに振り切った。土の壁が両断され、横薙ぎに蒼馬に迫る。

その一撃を、少し体を捻って紙一重で躱してみせる蒼馬。その表情はいつも同様、飄々としている。

【春蘭】

「くっ！はぁっ！」

裂帛の気合いを込めた一撃を、大上段から振り下ろしにかかる春蘭…だが、その一撃も蒼馬は見切っていた。

通過する彼女の剣の横、僅か1センチ…いや5ミリのところに、蒼馬の肩先が移動していた。

虚しく空を斬り、大地を穿つだけで終わった春蘭の攻撃は、それでも見る者を圧倒するだけの迫力がある。

【春蘭】

「ちょこまかとっ！逃げてばかりでは私には勝てんぞ！」

【蒼馬】
「やれやれ…意気がるだけじゃ、おじさんには勝てないよぅ？」

【春蘭】
「貴様っ！」

春蘭は怒りと力任せに、立て続けに剣を振り回した。
斜めに振り上げ、逆側から振り下ろし、体を回転させながらの横薙ぎ、最後には全体重をかけた突き…しかし、その悉くを、蒼馬は顔色一つ変えずに躱しきった。

【春蘭】
「はぁ、はぁ…バカな…」

【蒼馬】
「どうしたんだい？まさか、もう終わりってわけじゃないでしょう～？それとも、華琳ちゃんの剣である春蘭ちゃんの実力は、こんなものなのかな？」

【春蘭】
「ちぃっ！言わせておけばっ！」

大振りの一撃は容易く躱され…気づけば蒼馬は、彼女の背後に回り込んでいた。

【春蘭】
「いつの間に！」

【蒼馬】
「ふぅーぃ…久しぶりに運動したら、何だか暑いねぇ～。」
蒼馬はそう言って、青く綺麗な扇を取り出した。金属のような光沢を放つそれは、変わった形状をしている…まるで、先端が鉤爪のようだ。
それで自身を扇いでいたが、おもむろに扇を畳むと……

【春蘭】
「なっ！」

ガンッガガガッガギンッ…

一瞬で間合いを詰められ、春蘭は咄嗟に防御の態勢をとった。それが、彼女には精一杯だった…。凄まじい速さで、縦横無尽に振り回される蒼馬の扇子…腕の動きはまるで見えず、上下左右から同時と思えるような間隔で迫り続ける攻撃…それなのに、尋常じゃないくらい一撃一撃が重いのだ。

【春蘭】
『だ、ダメだ…やられるっ！』

剣を握る腕が痺れてきた春蘭…もはや数合ともたないと諦めかけた瞬間、蒼馬の攻撃が止んだ。
気づけば蒼馬は、もとの位置に立って涼しそうな顔をしながら、扇で自身を扇いでいた。

【春蘭】
「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ……」

肩で大きく息をする春蘭…見るからに疲労困憊している。それでも、蒼馬を睨む目だけは逸らさなかった。

【蒼馬】
「…今のおじさんの攻撃、ちゃんと数えてたかい？」

唐突に、そう尋ねる蒼馬。

【春蘭】
「そんなもの…」

数えられるはずがない、そう返そうとした時…彼女の右肩からピシリという、ひび割れるような音が聞こえた。見れば、髑髏を模した肩当てに、ヒビが入っている。

【蒼馬】
「全部で４０…その内、２３発はギリギリ剣で受けられる位置に、１２発は敢えて剣を狙って、残りの５発は…」

ビシッ　バキンッ

春蘭の肩当てが砕けて、その場に破片が散らばった…。

【蒼馬】
「あれぇ～、言う前にバレちゃったねぇ～。というわけで、残りはそれに当ててたんだよぅ。気づかなかったでしょ～？」

【春蘭】
「……」

【蒼馬】
「攻撃は当ててこそ意味がある…その為の速度であり、その上での威力だ。当てられない攻撃を百回繰り出す為の力や気なんて、いくら鍛えても無意味だよ。」

春蘭は呆然とした目で、砕けた肩当てから蒼馬に視線を戻した。その目には怒りや恐怖といった感情は宿っておらず、純粋な驚愕にのみ彩られていた。そこから湧き上がる感情は、一抹の好奇心…。

【蒼馬】
「強くなりたいって顔だねぇ～。でも、今日はもうその腕じゃ、剣は握れないだろう？また今度、ね。」

蒼馬はそう言って、春蘭を残しその場を後にした。

【蒼馬】
「ふぅーぃ…おじさんも大概、お節介が過ぎるんだよねぇ～。やっぱ、歳なのかなぁ～。」

などと呟きながら…。

第五話　覇王、死神と語らう

中庭から城内に入り、次なる暇潰しを探して歩いていた蒼馬の前から、水色の髪と青いチャイナドレス姿の女性が歩いて来た。
彼女は秋蘭…春蘭の妹の、夏侯淵である。

【蒼馬】
「やぁ、秋蘭ちゃん。」

【秋蘭】
「ん？その声は…蒼馬か？」

【蒼馬】
「正解♪」

秋蘭もまた、蒼馬の変身ぶりに驚きを隠せなかった。何しろ、あれだけむっさいオッサンだっただった蒼馬が…以下略…。

【秋蘭】
「見違えたぞ。それだけの容姿なのだから、普段から身なりを整えればよかろうに。」

【蒼馬】
「いやー、おじさんずっと一人旅だったからねぇ～。気を遣う必要が無くて…」

【秋蘭】
「はぁー…男とはいえ、姉者より身なり格好に無頓着な者がいるとは…」

何やら気苦労多そうな溜め息を吐き、秋蘭は両手に抱えた無数の竹簡を抱え直した。量が量だけに、かなり持ちづらそうである。
そう思っていると、蒼馬が手を伸ばしてきて、半分ほどの竹簡を秋蘭から奪い取った。

【秋蘭】
「蒼馬？」

【蒼馬】
「何処に持っていけばいいんだい？」

【秋蘭】
「あ、あぁ…華琳様のお部屋に持って行くところだ。」

【蒼馬】
「じゃあ、行こうか。まだ秋蘭ちゃんとは、二人で話した事無かったからねぇ。」

そう言って、蒼馬は竹簡を手にスタスタと歩きだした。なるほど、確かにこれは持ちづらい…蒼馬も改めてそう実感した。

【秋蘭】
「ふふ、面白いやつだな。お前は。」

【蒼馬】
「どうも♪まぁ、伊達に六百年も生きてないって事かな～。」

【秋蘭】
「ふむ、昨日も言っていたな。お前は嘘ではないと言うが、今のお

前はどう見ても姉者より少し上…二十五か六くらいにしか見えん。
そもそも、人の子が六百年も生きられるわけが…」
秋蘭の疑問はもっともだった。何しろ、この時代の人間の平均寿命なんて、五十そこそこ…いや、四十あればいいだろうか？
間違っても、人生百年なんて時代ではない。

【蒼馬】
「うん、普通ならね…本来なら、おじさんもとっくに死んでいたハズ、なんだけどねぇ～……」

その時、秋蘭には蒼馬の瞳に翳が差したように見えた…直感で、秋蘭は話題を変えるべきだと判断した。その話は、まだ…まだ自分が聞いていい話じゃない、そう判断したからだ。
おそらくそこには、複雑な事情があるに違いない。無理に聞き出すのは、治りかけの瘡蓋を剥がすようなものだろう。

【秋蘭】
「その服は？」

【蒼馬】
「あぁ、寝台の上に置かれててねぇ～。水浴びに行く前は無かったんだけどなぁ…誰か気を利かせてくれたんだろうけどねぇ。」

【秋蘭】
「我が軍に入るのか？お前が軍律を守る姿が、私には想像できないんだが…」

【蒼馬】
「うん、おじさんもだよぅ～。それこそ、兵の士気に関わるだろう

ねぇ～。」

やれやれと、秋蘭はまた一つ溜め息をついた。

【秋蘭】
「従ってくれる気はなしか…」

【蒼馬】
「ま、その辺は気まぐれかな～？」

などと話しているうちに、華琳の部屋の前まで辿り着いた。

【秋蘭】
「着いたな。済まないが、華琳様の居室は男子禁制なのだ。手伝ってくれてありがとう、蒼馬。今度、折を見てこの礼はしよう。」

【蒼馬】
「いいよぅ～、気にしなくても。じゃあ、またね～♪」

蒼馬はそう言って、その場を後にしようとする。と、そこで部屋のドアが開けられた。

【華琳】
「待ちなさい、蒼馬。」

【秋蘭】
「華琳様。」

【華琳】
「ご苦労さま、秋蘭。机の上に置いといてもらえる？」

【秋蘭】
「はい。」

【華琳】
「さて、蒼馬。時間はあるわね？少し付き合いなさい。」

華琳は蒼馬の返事を待たずに、そそくさと歩きだした。

【蒼馬】
「やれやれ、わがままなお嬢様だねぇ～。」

【華琳】
「何か言ったかしら？」

【蒼馬】
「～♪」

すっとぼけた蒼馬の態度に、不機嫌そうに眉間のシワを深くする華琳…だが、何を言っても無駄と早々に悟ったらしく、何も言い返さなかった。
そして二人がやって来たのは、城壁の上…そこからは、華琳が治める陳留の街並みを一望する事ができた。

【華琳】
「蒼馬。貴方にはここから、何が見えるかしら？」

【蒼馬】
「何って、街だろう？陳留だっけ～？」

【華琳】
「そうよ。でも、その答えじゃ及第点は上げられないわ。」

【蒼馬】
「おじさんの感想でも聞きたいのかい？そうだねぇ…小さな街だけど、活気がある。」

【華琳】
「えぇ…民がいて、彼らが街をつくり、賑わせる…そして、それを狙って戦が起きる。」

【蒼馬】
「…戦争…か。嫌だねぇ～。」

【華琳】
「でも、それが現実よ。豊かな町があって、それを制するだけの力があれば、金なり食糧なり力ずくで奪い去れば、そいつは一生楽して暮らせるんですもの。」

蒼馬の瞳が、僅かに曇りを見せた。彼は神術師のトレジャーハンター…あらゆる異世界を巡り、たくさんの街を見て、多くの人と出会って来た…中には、彼女が言ったような被害にあった町もあっただろう。さらに言えば、暴虐によって滅ぼされ、もう無くなってしまった町も…。

【華琳】
「けど、私が治める国では、絶対に戦なんて起こさせない。」

【蒼馬】
「相変わらず、凄い自信だねぇ～。」

【華琳】
「当然でしょう？民とは、弱いものよ。国とは、そんな弱い庶人を守る盾となり、また矛となるべきもの。その代わりに、労働力や資金を提供してもらい存在しているの。分かる？私の服も食事も、この城さえも…彼らの血と命で成り立っているの。」

【蒼馬】
「ふぅ～ん。それで、おじさんに何を言いたいんだい？」

【華琳】
「貴方、ちゃんと話を聞いていたのかしら？」

少し苛立たしげに、華琳は蒼馬を睨みつけた…華奢な体格だが、やはりその威圧感は凄まじい。

【華琳】
「ここに居るからには、貴方にもそれなりの働きをしてもらうわ。でなければ、食事も部屋も与えるわけにはいかないと…」

【蒼馬】
「なら、出ていくだけだよ～。」

【華琳】
「なっ！」

蒼馬は事もなげに言った。
華琳は聡明だ。先見の明もある。だが、さすがに蒼馬の考えは予測もつかなかったらしい。無理もない、衣食住は生きてくうえで絶対に欠かせないもの。それを奪われると言われて、ほいほい差し出す

ようなバカはいない。
それは絶対の常識、間違いようの無い事実…の、ハズだった。

【蒼馬】
「忘れたの？おじさんはただの旅人なんだ。別に、置いてくれと頼んだ覚えはないよ～。」

【華琳】
「そ、そうだったわね…」

らしくもなく、彼女は失念していた。
ここに彼が居るのは、彼ではなく自分が望んだ事だ。一刻も早く、彼を手なずけなければと焦るあまり、そんな事も忘れていたのである。

【華琳】
「でもね、蒼馬…私は欲しいと思うものは必ず手に入れるわ。いつか貴方も、自ら望んで私に従うようにしてみせる。覚えておきなさい。」

【蒼馬】
「ふぅー…やれやれだねぇ～。まぁ、言ってくれれば出来る限りの事はするよぅ。」

【華琳】
「えぇ、そうして頂戴。私も遠慮なく命令させてもらうから。」

【蒼馬】
「命令は嫌だな…おじさん、命令されるの大嫌いだから。正確に言うと、言いなりになるのが、ね。」

蒼馬の声が、明らかに低くなった。雰囲気も、何処かピリピリしている…。
華琳もそれを悟り、すぐさま話を逸らした。

【華琳】
「ま、まぁそれはそうと…蒼馬、民を守るためには、どうしたらいいと思うかしら？飢饉にあえがず、盗賊に奪われず、他国の侵略に怯えず、民の平穏と日常を守るためには…」

【蒼馬】
「…そんな事が可能なら、おじさんの方が知りたいよ～。」

【華琳】
「答えそのものは簡単よ。国を強くすればいい…人が増え、土地が豊かになれば、豊かな国を作れる。商業や工業が発展すれば、良質な武器を生み出し、国庫も潤う。でも、その為にしなければならない事が、難しいのよ。」

【蒼馬】
「…皆が安心して暮らせる国にする事、かい？」

【華琳】
「そうよ。分かってるじゃない。血税は、民衆の祈り…この国を、豊かで大きく、平和な国にする為の。」

【蒼馬】
「…恩義に報いぬは恥、か…」

【華琳】

「蒼馬？」

【蒼馬】
「昔、そう言ってた子がいてね…恩義に報いぬは恥、忠義を尽くさぬは罪、仁義を欠くは人に非ず…」

【華琳】
「良い言葉ね。どんな人だったの？」

【蒼馬】
「しがない兵士さ。生きていれば、一角の将になったかも知れないが…主君や上司である将軍、仲間達を死地から逃がす為に、若い命を落とした…」

【華琳】
「そう…」

華琳も、蒼馬の話してくれたその彼の死を悼んだ。

【蒼馬】
「…まぁ、彼の最後については、後になって知ったんだけどねぇ～。はぁ～、しんみりしちゃったね…平和な国にしたいって話だったけぇ？」

【華琳】
「えぇ。国が一つにまとまれば、争いはなくなる…その為に、貴方の力を貸して欲しいの。」

【蒼馬】
「買い被りすぎだよ～。おじさんは、ただの旅人なんだから…」

【華琳】
「いいえ。とぼけた態度で隠してるつもりだろうけれど、私の目は誤魔化せないわよ。」

【蒼馬】
「…なるほど。君への認識を改める必要があるねぇ～。今朝の非礼も詫びておくよ。ふふ、争いを無くすか…いいでしょう。そういう事なら、おじさんの力も貸してあげようかね～。これからよろしく、華琳。」

【華琳】
「えぇ。期待させてもらうわよ、蒼馬。」

二人は笑顔で握手を交わした。
二人は決して、主君と家臣という関係ではない…むしろそれは、協力者と呼ぶ方が相応しいだろう。

【華琳】
「とりあえず、貴方には我が軍の兵になってもらうわ。近いうちに出陣する予定だから、調練に参加して最低限の動きは覚えてちょうだい。」

【蒼馬】
「出陣？穏やかじゃないねぇ～。」

【華琳】
「山向こうの町や村を脅かしている盗賊たちがいてね。近々、正式に朝廷から討伐の命が下るはずよ。」

そして翌日、その話は現実のものとなる。
蒼馬は一兵卒として、一体どんな働きを見せるのだろうか？

第六話　猫耳軍師、覇王を試す

盗賊討伐の命が下されてから数日…城内はにわかに、緊張した空気を漂わせ始めていた。
出陣準備の為に、慌ただしく動き回る軍の者たち…出陣準備と一口に言っても、遠征である以上、剣を持って鎧を着込めば「はい、終了。」とはいかない。糧食を始め（当然、調理器具や食器も含まれる）、武具（弓隊の矢は千から万単位だ）、馬（馬具も含む）、薬などの医療品など…用意するだけでも一苦労だ。
その忙しさたるや、まさに戦争…何の比喩でも例えでもなく、既に戦は始まっているのである。

【蒼馬】
「ふぅ～…凄いねぇ～。こういうのは、何度見ても壮観だねぇ。」

城壁の上から、忙しなく動き回る兵たちの様子を眺めている蒼馬…何を高見の見物などしているのだろうか？彼もこれから出陣だろうに…やる気は、これっぽっちも見受けられない。

【蒼馬】
「…と、いけないいけない。糧食についての帳簿を取って来るよう、華琳に言われてたんだっけ。のんびりしてたら、怒られちゃうねぇ～。」

本来の自分の役割を思い出し、目的の場所へ駆け出した。
先刻、秋蘭から、帳簿の管理をしている監督官は、厩で馬具の点検をしていると聞き、急ぎやって来た蒼馬だったが…周囲の兵たちは見るからにピリピリしていた。

【蒼馬】
「さてと、監督官っていうのはどの子かな？」

辺りを見回していた蒼馬は、明らかにこの場に場違いな格好でいる一人の少女を見つけた。
ライトグリーンの猫耳フードが場違いに当たらない場所があるなら、ぜひとも教えて欲しいものだが。

【蒼馬】
「ねぇ、そこのお嬢ちゃん。糧食の帳簿を貰いに来たんだけど…」

何故か蒼馬は、その場違いな少女に声をかけた。しかも、例の帳簿についてだ…この場合は、迷子に対する応対が正解だと思うのだが？

【？？】
「……」

【蒼馬】
「あれ？もしも～し？お嬢ちゃん？」

しかし、蒼馬の呼びかけに少女は答えてくれない…

【蒼馬】
「あれぇ？聞こえてないのかな…おーい、そこの可愛らしいお嬢ちゃん。糧食の…」

【？？】
「うるさいわね、さっきから何度も何度も何度も何度も。」

【蒼馬】

「いやぁ～、返事がないから、聞こえてないのかと思って…」

やっと蒼馬の方を振り向いた少女は、忌ま忌ましげな目で蒼馬を睨み上げた。

【??】

「で、何の用？わたしは忙しいんだけど？」

と、迷子のくせに少女は一丁前にのたまっ…

【蒼馬】

「糧食に関する帳簿を、華琳から預かって来るように言われてねぇ。君が持ってるんだろう？」

【??】

「なっ！あんた、何で曹操様の真名を…」

そんな事より、蒼馬は何で彼女が持ってると思い込んでいるのだろうか？どう見ても、彼女は迷子か…或いは、ここの兵の娘さんだろう。

【蒼馬】

「何でって、そう呼ぶように言われてるからだよ～。それより、帳簿は何処だい？」

【??】

「ふん、その辺にあるわ。草色の表紙のがそうだから、勝手に持って行きなさいよ。」

【蒼馬】

「うん、ありがとう。」

程なくして、蒼馬は目的の帳簿を見つけその場を後にした。監督官の許可も得ずに、いいのだろうか？

【蒼馬】
「あ、お～い、華琳。例の帳簿とやら、受け取って来たよ～。」

【華琳】
「御苦労、蒼馬。」

帳簿を受け取った華琳は、その場で中身に目を通していく。すると、何故か彼女の眉間にシワが一本刻まれた。不機嫌…というより、訝しみ何事か思案を始めた様子だ。

【華琳】
「…秋蘭。」

【秋蘭】
「はっ。」

【華琳】
「この監督官は、一体何者なのかしら？」

【秋蘭】
「はい。先日、志願してきた新人です。仕事の手際がよかったので、今回の食料調達を任せてみたのですが…何か問題でも？」

【華琳】
「ここに呼びなさい。大至急よ。」

【秋蘭】
「はっ！」

秋蘭はすぐさま厩の方へ向かった。
その場に残された華琳、春蘭、蒼馬は、しばらく無言で準備に奔走する兵たちを眺めていた。

【華琳】
「…遅いわね。」

沈黙を破ったのは、意外にも華琳だった。というか、まだ5分くらいしか経っていない…彼女の機嫌は、みるみる下降していた。

【春蘭】
「遅いですなぁ。」

春蘭も、そんな空気をさすがに読んだようで、華琳の呟きに同調する。
よもやこの状況で、彼女の神経を逆撫でするようなK．Y．者などおるまい。

【蒼馬】
「せっかちさんだねぇ～。もうすぐ来るよ～。」

…いた。このピリピリした空気を、少しくらい読んでもよさそうなものだが…。
華琳も、怒りをぶつけてやりたいのは山々なんだろうが…相手は蒼馬だ。自慢の大鎌〈絶〉の方が、悲鳴を上げてしまうだろう。
結局、周囲の空気が一層重苦しくなっただけだった。

それから数分後…

【秋蘭】
「華琳様、連れてまいりました。」

そう言って秋蘭が連れてきたのは…何故か、さっきのあの迷子の女の子だった。
秋蘭までふざけているのかと一瞬思ったが、蒼馬じゃあるまいしそんなわけが無い。
つまり、この猫耳フードの彼女こそ、話に上がっていた新人の監督官なのだろう。
少女はフードを下ろし、華琳の前に立った。

【華琳】
「お前が食料調達を？」

【？？】
「はい。必要十分な量は用意したつもりですが…何か問題でもありましたでしょうか？」

【華琳】
「必要十分って…どういうつもりかしら？指定した量の半分しか準備できてないじゃない！」

…半分？それは、単純に考えると行きの分しかないという事だろうか？それではまるで、神風特攻隊…無論、この時代の華琳が彼らの事を知るはずもないが、それでもやはり怒るだろう。

【華琳】
「このまま出撃したら、糧食不足で行き倒れになるところだったわ。

そうなったら、貴方はどう責任をとるつもりだったのかしら？」

【？？】
「いえ、そうはならないはずです。」

問い詰める華琳に対し、少女は毅然と返答した。凡人なら間違いなく、縮みあがるであろう覇気を浴びながらである…。

【華琳】
「何？…どういう事？」

【？？】
「理由は三つあります。お聞きいただけますか？」

【華琳】
「…説明なさい。納得のいく理由なら、許してあげてもいいでしょう。」

暗に、納得いかなければ…という脅しなのだが、少女の表情は自信に満ちている。
…なるほど…蒼馬が彼女を監督官だとすぐに見抜いたカラクリがやっと分かった。

【？？】
「…ご納得いただけなければ、それは私の不能がいたす所。この場で我が首、刎ねていただいても結構にございます。」

華琳の覇気から彼女を守る、絶対の自信…知略を極めし者のみが身につける事ができる、賢者の覇気。少女は、それを持っていたのだ。

【華琳】
「…二言はないぞ？」

【？？】
「はっ。では説明させていただきますが…まず一つ目。曹操様は慎重なお方ゆえ、必ずご自分の目で糧食の最終確認をなさいます。そこで問題があれば、こうして責任者を呼ぶはず。行き倒れにはなりません。」

【華琳】
「ばっ！馬鹿にしているのっ！春蘭！」

【春蘭】
「はっ！」

春蘭が剣を握ろうと手を伸ばす…が、その手首を蒼馬が押さえた。

【春蘭】
「くっ、蒼馬！放せっ！」

【蒼馬】
「待ちなって～。まだ話の途中でしょう～？」

【秋蘭】
「蒼馬の言う通りかと。それに華琳様、先ほどのお約束は…」

ここは秋蘭も、華琳の宥め役に回ってくれた。

【華琳】
「…そうだったわね。で、次は何？」

【??】
「次に二つ目。糧食が少なければ身軽になり、輸送部隊の行軍速度も上がります。よって、討伐行全体にかかる時間は、大幅に短縮できるでしょう。」

確かに、馬に乗っている兵たち自身と違い、重たい物資の輸送は当然ながらスピードが落ちる。本隊と分断させるわけにもいかないのだから、行軍速度は輸送部隊の速度に合わせる事になるだろう。
しかし…

【春蘭】
「ん…？なぁ、秋蘭。」

【秋蘭】
「どうした姉者。そんな難しい顔をして。」

【春蘭】
「行軍速度が速くなっても、移動する時間が短くなるだけではないのか？討伐にかかる時間まで半分にはならない…よな？」

【秋蘭】
「ならないぞ。」

春蘭も気づいた通り…糧食を半分にしたからって、討伐行にかかる時間まで半分とはいかない。
休憩や戦闘に要する時間もあるし、そもそも行軍速度だってさすがに倍になったりはしない。

【華琳】

「まぁいいわ。最後の理由、言ってみなさい。」

【??】

「はっ。三つ目ですが…私の提案する作戦を採れば、戦闘時間はさらに短くなるでしょう。よって、この糧食の量で十分だと判断いたしました。」

そこまで言うと、少女は一つゆっくり息を吸い、一気にまくし立てた。

【桂花】

「曹操様！どうかこの荀‘イク’めを、曹操様を勝利に導く軍師として、幕下にお加え下さいませ！」

【秋蘭】

「なっ…！」

【春蘭】

「なんと…」

秋蘭、そして春蘭が一様に驚きの表情を見せる横で、蒼馬は普段通りヘラヘラとした笑みを浮かべていた。その緩んだ顔を引き締めれば…せっかくのいい男が、これでは台無しである。

さて、華琳は…

【華琳】

「……」

黙して、荀‘イク’を品定めでもするように眺めていた。

【桂花】
「どうか！どうか！曹操様！」

【華琳】
「…荀、イク、。貴方の真名は？」

【桂花】
「桂花にございます。」

【華琳】
「桂花。貴方…この曹操を試したわね？」

【桂花】
「はい。」

やはり、少女は毅然としている…瞳に宿る光は、未だ揺らぎを見せない。

【春蘭】
「なっ！貴様、何をいけしゃあしゃあと…華琳様！このような無礼な輩、即刻首を刎ねてしまいましょう！」

激昂する春蘭に対しても…

【桂花】
「あなたは黙っていなさい！私の運命を決めていいのは、曹操様だけよ！」

この言い返しだ。賢者の覇気の特殊効果とでも言おうか、覇気や威圧を撥ね退ける効力のおかげである。

【春蘭】
「ぐっ！貴様ぁっ！」

【蒼馬】
「だから春蘭ちゃん、ちょっと落ち着こうよぅ。短気は損気だよ～。」

【春蘭】
「ぐぅぅ…」

再び剣を掴む手を押さえられ、渋々ながら引き下がる春蘭…その間にも、華琳と桂花の話は続く。

【華琳】
「桂花。軍師としての経験は？」

【桂花】
「はっ。ここに来るまでは、南皮で軍師をしておりました。」

【華琳】
「…そう。どうせあれのことだから、軍師の言葉など聞きはしなかったのでしょう。それに嫌気が差して、この辺りまで流れてきたのかしら？」

【桂花】
「まさか。聞かぬ相手に説くことは、軍師の腕の見せ所。まして仕える主が天を取る器であるならば、その為に己が力を振るうこと、何を惜しみ、躊躇いましょうや。」

【華琳】
「…ならばその力、私のために振るうことは惜しまないと？」

【桂花】
「一目見た瞬間、私の全てを捧げるお方と確信いたしました。もしご不要とあらば、生きてこの場を去る気はありませぬ。遠慮なく、この場でお切り捨て下さいませ！」

沈黙が、辺りを支配した…言葉を発することが許されないほど、重々しい空気…。

【蒼馬】
「やれやれ、穏やかじゃないねぇ～。」

全く関係ないという体で、蒼馬が口を開いた…本当にK．Y．な男だ。

【華琳】
「…春蘭。」

【春蘭】
「はっ。」

華琳はすでに、蒼馬の態度に関しては、必要な時以外は無視を決め込むことにしたようだ。
何も言わずに出された手に、春蘭は華琳の得物である絶を渡す。死神を思わせる鎌を、ぴたりと桂花に突き付ける華琳…その顔は笑いながらも、瞳は冷たく燃えていた。

【華琳】

「桂花。私がこの世で最も腹立たしく思うこと…それは、他人に試されるということ。分かっているかしら？」

【桂花】
「はっ。そこをあえて、試させていただきました。」

【華琳】
「そう…なら、こうする事も、貴方の手の平の上という事よね…」

言うなり、華琳は絶を振り上げ…桂花めがけ振り下ろした。蒼馬も止めに入れなかった…いや、入る気がなかったのかもしれない。何しろ…

【桂花】
「……」

桂花はケガ一つ負っていなかったからだ。
絶の刃は、彼女の首を刈り取る寸前で止められていた。

【華琳】
「もし、私が本気で振り下ろしていたら、どうするつもりだったのかしら？」

【桂花】
「それが天命と受け入れておりました。天を取る器に看取られるなら、それを誇りこそすれ、恨むことなどございませぬ。」

【華琳】
「…嘘は嫌いよ。本当の事を言いなさい。」

見え透いたおべっかなど、華琳には通じなかった。

【桂花】
「曹操様のご気性からして、試されたなら、必ず試し返すに違いないと思いましたので。それに…わたしは軍師であって武官ではありませぬ。あの状態から曹操様の一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでした。」

【華琳】
「そう…」

静かに、華琳は絶を下ろした。

【華琳】
「…ふふっ、あはははははっ！」

【春蘭】
「か、華琳様？」

突然、気が狂れたように…というか、心底愉快そうに笑い出す華琳に、春蘭が心配そうに声をかける。

【華琳】
「最高よ、桂花。私を二度も試す度胸とその知謀、気に入ったわ。貴方の才、私が天下を取るために存分に使わせてもらう事にする。いいわね？」

【桂花】
「はっ！」

桂花は、本当に嬉しそうな笑みを浮かべていた。

【華琳】
「ならまずは、この討伐行を成功させてみせなさい。糧食は半分で良いと言ったのだから…もし不足したならその失態、身をもって償ってもらうわよ？」

【桂花】
「御意！」

こうして、華琳の陣営に軍師・桂花が加わった。
そしていよいよ、出陣の時を迎える。

第七話　死神の出陣

城を出た華琳の率いる軍…その数はおよそ一千騎ほど。それが悠然と行軍する様は、十分に壮観である。無論、ＣＧならこの何倍にも数増しできるだろうが、生身の兵と馬がこれだけの数をなし、隊列を作って進軍している光景は、おいそれと見られるものではない。

【蒼馬】
「いよいよだねぇ～。」

【秋蘭】
「そうだな。しかし、お前の顔を見る限り、緊張の色は窺えんが…」

秋蘭と話をしながら、蒼馬はのんびり馬に揺られていた。その顔はいつも通り、飄々とした笑みを浮かべており、これから命のやりとりをしようというのに緊張感の欠片もなかった。

【蒼馬】
「まぁ、何かあの子…桂花ちゃんだっけ？あの子が作戦とか考えてくれてるみたいだし、糧食の量から見ても楽に済みそうな感じだからねぇ～。」

【秋蘭】
「しっかり働いてくれよ。姉者に聞いたが、尋常じゃない腕前なのだろう？」

【蒼馬】
「買い被りだよぅ～。最近は腰痛にも悩まされてる、いい歳のおじさんなんだから～。」

何処がだ、と秋蘭は溜め息を吐いた。
そんな二人の視線の先に、あの猫耳フードが見えてきた。

【蒼馬】
「そういえば、まだ作戦の内容を聞いてなかったねぇ～。おーい、桂花ちゃ～ん。」

【桂花】
「なっ！あんた、何でっ！」

蒼馬の呼びかけに、桂花は目を吊り上がらせて怒りを露にする。

【蒼馬】
「ん、いや～ねぇ。作戦の内容を聞いてなかったなぁって思って…」

【桂花】
「バカ言わないで！あんたみたいな一兵卒に、何で前もって作戦を知らせる必要があるのよ！だいたい、気安く真名を呼ばないでちょうだいっ！」

【蒼馬】
「と、言われてもねぇ～…おじさん、年のせいか物覚えが悪くて…前もって聞いとかないと、ちゃんと動ける自信ないし…」

【秋蘭】
「それに、桂花よ。わたし達は華琳様同様、お前を真名で呼ぶとさっき華琳様から説明を受けただろう？」

【桂花】

「分かってるわよ！でも、何でそこにこんな何処の馬の骨とも知れない男が含まれるわけ？」

【蒼馬】
「あっはっはっは♪馬の骨か。ウマい事言うねぇ～。」

愉快そうに蒼馬は笑う…が、桂花は余計に腹を立ててしまったようだ。

【桂花】
「きぃーっ！何なのよ！あんた何様っ！」

【秋蘭】
「よせ、桂花。蒼馬の実力は、聞き及ぶところ姉者より上らしい。」

【蒼馬】
「……」

秋蘭がフォローしてくれたが、蒼馬はちょっと別のところで寂しがっていた。
どうやら先の発言…自身の名前と馬の骨、さらにはウマい事のウマまでかけたつもりだったらしい。親父ギャグ以下なので、ツッコミをいれるのも馬鹿らしいが…気づいてすらもらえなかったので、流石に寂しかったのだろう。

【桂花】
「ふん。とにかく、気安く人の真名を汚さないでよね。」

【蒼馬】
「ふぅー、酷いねぇ～。おじさんの繊細なハートが粉々だよぅ。」

だから何処がだ…と、秋蘭はまた溜め息を吐くのだった。

【蒼馬】
「ま、そんな事より…一体、どんな作戦を考えてるんだい？糧食半分なんて…かなり大胆なマネしちゃって…」

【桂花】
「そんな事って！」

なおも蒼馬を睨む桂花だったが、蒼馬の方が不意に視線を軍の前方へと向けた…。何やら、人だかりが出来ている…その中央で、何か小さな影が飛び回り、同時に大きな塊もあっちへこっちへ飛び回っている。

【蒼馬】
「……やれやれだねぇ～。」

【秋蘭】
「蒼馬？」

蒼馬は馬から降りると、隊列の外側に出た…

【秋蘭】
「お、おいっ！蒼馬、何処へ…」

【蒼馬】
「ちょっと先回りするね～。」

言うなり、蒼馬の姿が掻き消えた…後には砂煙だけが残り、忽然と

その姿は消えていた…。

【秋蘭】
「なっ！」

同時に、華琳のもとに先行部隊からの伝令が届いた。
行軍進路に、戦闘中の軍団があるとの事だった。しかも、それが野盗の集団と一人の少女と聞き、華琳も放っておけずに春蘭を救援に向かわせたのだった。

【？？】
「でぇぇぇいっ！」

ドゴンッ

【野盗A】
「ぐわっ」

野盗の一人が、少女の投げた巨大な鉄球をくらって吹っ飛んだ。

【？？】
「まだまだっ！でりゃあああっ！」

再度、少女は鉄球を投げ放つ…それはもの凄いスピードで野盗に命中し、くらった男は断末魔もあげられずに、ぺしゃんこになってしまった。
野盗の群れと戦っているのは、ピンク色の髪の毛を大きく二本に束ねた、まだあどけない少女であった。その可愛らしい容姿とは裏腹

に、得物の鉄球は凶悪なまでに大きい…彼女の身長と大差ないのではなかろうか？鉄球は、鎖で彼女の手元の十字架のような持ち手と繋がっている…これは、ひょっとして剣玉？

【野盗B】
「おいっ！ガキ一人に何してやがる、テメェらっ！数で押し潰せ！」

【野盗CDEFG】
「「「「「おおおっ！」」」」」

群れは、四方八方から少女を取り囲み、一斉に襲い掛かろうとしてきた。

【？？】
「はぁ…はぁ…さすがに、多すぎるよぉ…」

少女にも、疲労の色が見える…絶対絶命、かと思った瞬間……何かが、そう何かがその場を過ぎ去って行った。それは風となり、大の男たちを空へ…遥か上空へと吹き飛ばしてしまった。

【？？】
「へ？」

呆気に取られているのは、少女も野盗たちも一緒だ。

【蒼馬】
「ふぅ～ぃ…あ、あれ？通り過ぎちゃったかな？」

十メートルほど先の所に、蒼馬が立っていた…が、辺りを見回して行き過ぎたと分かると、慌てて戻ってきた。

同時に…男たちは空の散歩から帰ってきて、硬い地面に叩きつけられ意識を失ってしまった。

【蒼馬】
「お～い、お嬢ちゃ～ん。大丈夫かい？」

【？？】
「え？あ、え？う、うん。」

予想もしなかった事態に、少女はまだ混乱しているようだ…そんな彼女の傍に歩み寄ると、蒼馬はその頭を撫でてあげた。そうしてもらうのが、年相応なくらいの…幼い女の子。そんな彼女が、どうして野盗の群れなどと…。

【春蘭】
「お～い！そこの者、大じょ…って蒼馬！何故、ここに？」

駆けつけてきた春蘭は、目の前の光景と、軍の後方にいたはずの蒼馬の姿に唖然とした。

【蒼馬】
「ん？まぁ、いいじゃない。そんな事は…」

そんな事で済ましていい話じゃないが、まぁ相手が蒼馬では聞いても無駄であろう。

【野盗B】
「くっ、くそ…覚えてやがれ！」

辛うじて難を逃れていた野盗たちが、一目散に逃げ出した。

【春蘭】
「なっ、待てっ！」
慌てて春蘭が追いかけようとしたが…蒼馬がそれを引き止めた。
【春蘭】
「止めるな、蒼馬！奴らが逃げ…」
【蒼馬】
「好都合じゃない。拠点まで案内して貰おうよ～。」
【春蘭】
「…そうか。よし、お前たちは奴らの後を追え。」
春蘭は連れてきた部下たちに、そう指示を出した。
【蒼馬】
「うん、よく出来ました。」
そう言って、蒼馬は春蘭の頭を撫でた。
【春蘭】
「なっ！何をする！」
【蒼馬】
「いい子いい子～♪」
【春蘭】
「ば、バカにするな！」

顔を真っ赤にして、蒼馬の腕を払いのける春蘭…。

【？？】

「あ、あの…」

すっかり蚊帳の外になってしまっていた少女が、おずおずと声を上げた。

【蒼馬】

「ん～？何だい？」

【？？】

「た、助けてくれて、ありがとうございます。」

元気な声でそう言って挨拶する少女の姿に、蒼馬は目を細めた…中身がオッサンというか、すでにおじいちゃんなので、その目は孫の姿を見るそれに近かった。

【蒼馬】

「気にしなくていいよぉ～。年のせいか、最近とんとお節介焼きになっちゃってねぇ。ま、ケガが無くて何よりだねぇ～。」

【春蘭】

「そんな事より少女よ、なにゆえお主は一人で戦っていたのだ？」

蒼馬に任せておくと話が進みそうにないので、春蘭が代わりに尋ねた。

【？？】

「それは…」

と、少女が事情を話そうとした矢先に、華琳たちの本隊が到着した。

【華琳】

「…蒼馬？何故、貴方までここに？」

【蒼馬】

「あぁ…散歩？」

華琳はいい加減、頭痛を覚え始めていた。

【華琳】

『一刻も早く、彼を飼い馴らす必要があるわね』

【？？】

「…ねぇ、お姉さんたちって…ひょっとして、国の軍隊？」

心なしか、少女は警戒の色を浮かばせて華琳や春蘭を見つめる…。

【春蘭】

「む？まぁ、そうなるが…ぐっ！」

瞬間、少女は春蘭に向かって鉄球をぶつけてきた。一同は唖然としているが、蒼馬は特に驚いた様子も見せなかった。

【蒼馬】

「う～ん、穏やかじゃないねぇ～。」

そんな彼を尻目に、春蘭と少女の間に緊迫した空気が流れる…何と

か防いだ春蘭だったが、想像以上の重さに軽い腕の痺れを覚えていた。

【春蘭】
「貴様、何をっ！」

【？？】
「国の軍隊なんか信用できるもんかっ！高い税だけむしり取っておいて、僕たちを守ってくれようともしないでっ！」

ビュゥッ　ドゴンッ

鋭い音がするほどの勢いで繰り出される鉄球に、春蘭も苦戦を強いられる。

【蒼馬】
「なるほどねぇ～。だから一人で…」

【？？】
「そうだよっ！僕が村で一番強いから、僕がみんなを守るんだっ！盗賊からも、お前たち役人からもっ！でりゃあああああっ！」

【春蘭】
「くっ…こやつ、なかなか…」

相手が自分より小さな女の子という事もあり、本気を出せない春蘭は防戦一方だ。その上、少女の鉄球には悲しいまでの優しさと覚悟が宿っており、物質的な重さを何倍にも感じさせた。

【蒼馬】

「でも、妙だねぇ？華琳、そんな酷い政治してないでしょう～？」
街を見れば分かる…重税を課して民を苦しめていたら、あんなに街に活気があるはずがないのだ。

【秋蘭】
「この辺りの村は、華琳様の治めている土地ではない。」

【桂花】
「だから、遠征してきてはいるけれど、華琳様もその政策に口出しできないのよ。」

【華琳】
「……」

秋蘭と桂花の説明に、華琳はどこか憂いを帯びた目で少女を見つめるばかりで、自ら口を挟もうとはしなかった。

【蒼馬】
「…なるほど…難儀な話だ…」

それだけ言って、蒼馬はもう手も口も挟まなかった。押され気味の春蘭に手を貸すでもなく、ただ事の成り行きを見守るのだった。

【？？】
「でぇぇぇいっ！」

【春蘭】
「くっ！やるしか…だが、しかし……」

反撃を躊躇う春蘭…と、その時…

【華琳】
「そこまでよっ！」
華琳が厳かに声を上げた。王の覇気を持つ彼女の一喝に、少女も思わず攻撃の手を止めた。

【華琳】
「武器を引きなさい、春蘭。」

【春蘭】
「は？しかし…」

突然襲い掛かられたのだ…警戒を解くわけにはいかないだろう。
戸惑う春蘭の様子に、華琳は覇気を強めて一声…

【華琳】
「剣を納めよ、夏侯元穣！これは命令である！」

【春蘭】
「は、はっ！」

慌てて下がり、剣を納める春蘭…

【華琳】
「…春蘭、この子の名前は？」

【春蘭】
「え？あ…」

まだ、誰も少女の名前を聞いていなかった。何かと間の悪いところで、本隊が到着したからだ。

【季衣】
「あ、許緒といいます…」

圧倒されているのだろう…許緒と名乗った少女は、華琳から目を離せなかった。

【華琳】
「そう…許緒、ごめんなさい。」

【季衣】
「え？」

そんな許緒に対し華琳は、真摯に頭を下げた…相手が子供だからと侮ることなく、あのプライドの高い華琳がである。

【季衣】
「あ、あの…」

思いもしなかった華琳の行動に、逆に許緒は戸惑ってしまった。それはそうだ…彼女にとってお役人というのは、自分たちをこき使って、税を奪い、威張り散らすだけの、盗賊と何ら変わらない連中なのだから。それが、自分のような年端もいかない子供に頭を下げるなど…彼女にとっては衝撃以外のなにものでもなかった。

【華琳】
「名乗るのが遅れたわね。私は曹操…山向こうの陳留の街で、刺史をしている者よ。」

それを聞いた許緒は、驚くと同時に申し訳なさで縮み上がってしまった。

【季衣】
「山向こうって、それじゃあ…ご、ごめんなさい！」

今度は許緒が頭を下げた。

【季衣】
「山向こうの街の噂なら聞いてます。刺史の人がとってもいい人で、税金も安くなって、盗賊の被害も少なくなったって…そんな人に、ボク…ボク……」

【華琳】
「構わないわ。この国が腐敗している事は、刺史を務めるわたしが一番知っているもの…官と聞いて憤る許緒の気持ちは、むしろ当然と言うべきだわ。」

そう言った華琳の瞳は、深い憂いの色を帯びていた…。
と、そこへ偵察の部隊が戻ってきた…追跡の結果、敵の本拠地はすぐそことの事だった。

【華琳】
「ねぇ、許緒…私たちはこれから、貴方の村を襲っていた連中を根絶やしに行くのだけれど、良かったら貴方の力も貸してくれないかしら？」

【季衣】
「ボクの力を…？」

【華琳】
「そうよ…村を守る為に、二度と盗賊の襲撃に怯えて暮らさずに済むように…私たちに、貴方の勇気と力を貸してちょうだい。」

【季衣】
「…分かりました。村のみんなのためにも、ボク頑張ります！」

【華琳】
「ありがとう、許緒。これより行軍を再開する！総員、騎乗！」

再び、軍は動きだした…。
許緒は取りあえず、春蘭の下につく事になった。（ちなみにお気づきと思うが、蒼馬は秋蘭の部下という事になっている）

【季衣】
「あの夏侯惇さま…さっきは、ごめんなさい……」

【春蘭】
「ん、何。もう気にせんでいい。それより、わたしの事は春蘭と呼ぶがいい。」

それを聞き、許緒の顔がぱぁっと明るくなる。年相応の、眩い笑顔だ。

【季衣】
「はい！ありがとうございます、春蘭さま。ボクの真名は、季衣です。」

【春蘭】

「よし、季衣。盗賊どもに、我らの力を思い知らせてやるぞ。」

【季衣】
「はいっ！」

春蘭と季衣は、あっという間に打ち解けた…もともと秋蘭という妹がいる春蘭には、姉属性というのが備わっているのだろう。二人はまるで、仲の良い姉妹のようである。
そんな二人よりも後方を行くのは、秋蘭と蒼馬…こちらは逆に、まだまだ互いに探り合いをする間柄だ。尤も、蒼馬の方は飄々とはぐらかすだけで腹の底も手の内も明かそうとはしないが…。

【蒼馬】
「いい子が入ったねぇ～。純粋で、すっごく素直な子だよ～。」

【秋蘭】
「うむ。それに、姉者に苦戦を強いる武力も称賛に値する。頼もしい仲間が出来た。」

【蒼馬】
「そうだねぇ。これで、おじさんもちょっと楽が出来るよぅ。」

秋蘭は、もう何度目か分からない溜め息を吐いて蒼馬を見つめた。

【秋蘭】
「お前の言葉をそのまま受け取る気はないが、どう受け取ればいいのか未だに分からんよ。」

【蒼馬】
「やだなぁ～。それじゃあまるで、おじさんが腹黒いみたいじゃな

い。」

【秋蘭】
「…違うと、言い切れるのか？」

蒼馬を横目で鋭く睨みつけ、彼の内心を探ろうとするのだが…逆に蒼馬と目が合った瞬間、不意に意識が飛びかけた。

【秋蘭】
「……っ！」

【蒼馬】
「おじさんは、本心でしか語ってないからねぇ。ただ…おじさんの事は、百の言葉を尽くして説明したって、どうせ信じられないだろうからね～。」

そう言って誤魔化す蒼馬に、秋蘭は一層と警戒を強めた。
怒声たけで軍馬を怯えさせ、姉の剛剣で薄皮一枚傷つけられず、自身もまた…目を合わせただけで気絶しかけた。蒼馬について分かっているのは、現在これだけなのだ…警戒するのが当たり前である。

【蒼馬】
「ま、この間も話したけど…おいおい、ね。」

【秋蘭】
「…我らは、お前を信用していいんだ？」

【蒼馬】
「もっちろん♪恩はちゃんと返すよぅ♪」

と言ってるうちに、どうやら盗賊たちの本拠地が見えてきたらしい。
前方の部隊から、秋蘭と蒼馬に召集が掛けられた。
次章、ついに蒼馬が本領を発揮する…のか？

第八話　死神、戦場を彩る

盗賊たちのアジトは、季衣と出会った場所からほど近くにあった。これだけ近くにあったなら、わざわざ偵察なんかしなくてよかったんじゃね？と言いたくなるのは、あくまで素人だ。

【華琳】
「あれがそうね。」

【桂花】
「偵察の報告では、敵の数は三千ほどだそうです。」

【華琳】
「こちらが千と少しだから、数でみると相当な差ね。」

桂花の報告に、しかし華琳は動じることもなく平然とした様子で淡々と呟いた。

【華琳】
「相手は烏合の衆、正面からでも十分に勝てる戦ではあるけれど…桂花、そろそろ作戦の内容を説明してちょうだい。」

【桂花】
「はい。誰か夏侯惇と夏侯淵、許褚を呼んできて。」

近くの兵が、すぐに召集の命を伝えに走ろうとする。

【華琳】
「蒼馬も呼びなさい。」

華琳が慌てて付け足した。兵は一礼の後に再び駆け出した。

【桂花】
「華琳様？あのような者を呼ぶ必要など…」

【華琳】
「そう嫌そうな顔をしないの、桂花。この戦は、彼の実力を知るのにちょうどいい機会だもの。確かめる必要があるのよ。蒼馬を配下においておく為には、ね…」

華琳にとっては、よっぽど蒼馬の方が難しい問題なのであった…。程なくして、春蘭と季衣、秋蘭、蒼馬が集まった…。

【蒼馬】
「へぇ～、あの砦がそうなのかい？」

蒼馬は目の上に手を横にして翳し、前方にまだ小さくしか見えない砦の影を確認した。

【桂花】
「それでは華琳様、作戦について説明します。」

誰も蒼馬に構ってくれなかった…。

【桂花】
「まず、華琳様には少数の兵を率い、砦の前で軍を展開していただきます。その上で銅鑼を鳴らせば、盗賊たちは簡単に砦から出てくるでしょう。そこで、華琳様は兵を連れて後退…盗賊たちを砦から引き離して下さい。そして、あらかじめ伏せておいた主力部隊で後

方から奇襲をかければ、容易く盗賊たちを討伐できる事でしょう。」

【春蘭】
「ちょ、ちょっと待てっ！」

桂花の案に、春蘭が慌てて待ったをかけた。憤慨した様子で、異議を唱える…。

【春蘭】
「華琳様を囮にするなど、危険すぎる！」

【秋蘭】
「姉者。気持ちは分かるが…」

【桂花】
「これが最も有効な作戦よ。ただ賊を討伐したって、誰の記憶にも残らない…最小の被害で、最大限の功績を立ててこそ意味があるのよ。」

【春蘭】
「ぬぬ…」

桂花の説明に、口をへの字に曲げて黙り込むしかない春蘭…その武は右に出る者なしと言われても、口先と頭の回転は悪いのだ。
そんな春蘭を…

【秋蘭】
『あぁ…拗ねる姉者もかわいいなぁ…』

秋蘭は心の中で愛でるのだった…顔が少しニヤけているが、春蘭は

気づいていないようだ。

【春蘭】
「なら、せめて誰か護衛に…」

【桂花】
「主力部隊の戦力を下げたくないんだけど…」

桂花は春蘭の妥協案とも言える提言にも渋い顔だ…と、そこで華琳が、

【華琳】
「なら蒼馬、貴方が来なさい。」

【春蘭&桂花】
「「華琳様？」」

春蘭と桂花の声が見事にハモった。

【華琳】
「構わないわね、秋蘭。」

【秋蘭】
「はっ。我が隊はもとより弓隊…蒼馬が抜けたからといって支障はありません。」

【華琳】
「護衛はこれで問題ないでしょう？」

【蒼馬】

「そうだねぇ～、最初はとりあえず華琳と一緒に逃げとけばいいんでしょう～？おじさん、逃げ足には自信あるからねぇ～。」

それは自慢にならない…だいたい、目的はあくまで華琳の護衛だ。分かっているのだろうか、このいかがわしい自称オッサンは…。というわけで、主力部隊として九百が伏兵として置かれ、二百弱の囮部隊が砦の前に展開した。

【蒼馬】
「思ったより小さな砦だねぇ～。」

【華琳】
「何なら、好きに暴れてもらっていいわよ？」

【蒼馬】
「若い頃なら、ね～。もう年だし、そういう無茶は御免被るよぅ。」

【華琳】
「そう。でも、戦いが始まったら、年なんて言い訳は聞かないわよ？」

そして…作戦通り銅鑼が鳴らされ、その音色が天高く鳴り渡った…次の瞬間、盗賊たちが砦からどっと飛び出してきた。

【蒼馬】
「あれ～？何か、予想以上に凄い勢いだねぇ～？」

【華琳】
「桂花？これも作戦通り？」

【桂花】
「いえ。おそらく出陣の合図と勘違いしたのではないかと…」

【蒼馬】
「とりあえず、早いとこ退いた方がいいねぇ～。」

【華琳】
「全軍、転換！作戦通り、撤退を開始せよ！」

華琳の合図で、囮部隊は一糸乱れず後退を始めた。

【蒼馬】
「奴さんたち、統率も陣形もあったもんじゃない。烏合の衆って、カラスの方がマシでしょう～？」

皆全力で逃げているのに、蒼馬だけは余裕の表情で馬を走らせながら、盗賊たちの様子を観察していた。
確かに、盗賊たちは我先にと追いかけてきており、見る間に砦から距離が離されていく。
あっという間に、所定の位置まで逃げてくると…伏兵の主力部隊が盗賊たちを後方から襲撃、さらには弓隊による斉射…盗賊の大群は一気に混乱し、次々に討ち取られていった。

【蒼馬】
「ふぅ～い…じゃあ、おじさんも働くとしようかねぇ～。」

ついに、蒼馬も馬から下りて盗賊たちの群れに突っ込んで行った。
剣を抜き、混乱する盗賊たちの懐に踏み込んで一振り。閃く銀色の光…飛び散る血飛沫…そして、転がる首という名の肉片……蒼馬の周囲にいた十人近い盗賊たちの身に、それは等しく起きた。

断末魔さえ聞こえないほど、一瞬の出来事…彼らはきっと、自分たちの死を自覚する暇もなく、命を絶たれたのだろう。ある意味、それは幸いな事だ…苦痛すら感じる間もなかったのだから。
次の瞬間には、もはや蒼馬が通った後に上がる血飛沫しか見えなくなった。

【華琳】
「は、速い…」

華琳はそう呟くことしか出来なかった。桂花にいたっては、驚愕の表情を浮かべ固まっている…。
蒼馬は再び、もう何度目か分からない剣閃を放った。

【盗賊A】
「なっ！てめぇ！」

一人の男が、仲間の仇だと蒼馬に襲いかか…

【蒼馬】
「遅いねぇ～。」

る前に、首が飛んだ…。一緒に、近くにいた五、六人の首も宙を舞う…。
転がる死体が積み重なり、足を取られたりしないように、あっちへこっちへ瞬時に移動して回りながら戦う蒼馬。血飛沫の上がった位置からだいぶ離れた場所で、次の瞬間に上がる鮮血…それだけが、彼の移動を教えるのみ。ついて行くなど不可能だ。

【盗賊B】
「な、何だ？アイツ！」

【盗賊C】
「消えた？」

【盗賊D】
「こっちも五人やられたぁーっ！」

盗賊たちは、さらに戦々恐々とし始めた。現れたと思えば、鮮血だけを残し姿を消す蒼馬は、彼らにしてみれば死神に見えただろう。一方的だった…蒼馬一人で、あっという間に百人は斬られただろう。一秒につき平均十人はやられるのだから、単純に三百秒で三千人に達する計算になる。事実、たった三分で…盗賊たちは当初の三分の一しかいなくなっていた。

【蒼馬】
「ふぅ～…ちょっと疲れたねぇ～。」

蒼馬は剣に付いた血を払って鞘にしまうと、年寄りくさい所作で自分の肩や腰をトントンと叩いた。
そんな様子を見て、盗賊たちは…今が好機とでも思ったのだろうか、一斉に蒼馬めがけ襲い掛かった。群がる盗賊たちに、蒼馬の姿は完全に飲み込まれた…

【盗賊E】
「死ねぇーっ！」

【盗賊F】
「殺されたやつらの恨みだぁっ！」

ギャーギャーワーワー叫びながら、盗賊たちは蒼馬をボッコボコに

する…人垣の中からは、暴行を受け、肉が潰れ骨が折れるような音が聞こえてくる。

【華琳】
「ちょ、ちょっと、蒼馬！」

華琳は慌てた様子で声を上げる…が、

【蒼馬】
「うん？何だい？」

【華琳】
「は？や、えっ？蒼馬…いつから、そこに？」

何故か、盗賊たちに囲まれ袋叩きされているはずの蒼馬は、華琳の背後にある岩の上で暢気に胡坐をかいていた。

【蒼馬】
「疲れちゃって～。ちょっと休憩しようと思って…」

【華琳】
「何をしたの？」

【蒼馬】
「ん？あぁ…今のは、空間転移…さっきまでのは、瞬脚っていう高速歩方のマネごとさ。」

と、やっと音と叫び声が収まったと思ったら、今度は…

【盗賊G】

「な、なんだぁっ？」

【盗賊F】
「お、おい！しっかりしろ！」

盗賊たちがうろたえるように騒ぎ始めた…その中心には、ボロ雑巾のようになった彼らの同士の姿があった。蒼馬に、身代わりにされたのだろう…。

【盗賊C】
「どうなってんだよ？何なんだよ、あの男！官軍の一兵卒じゃねぇのか？」

【盗賊D】
「おい、やべぇよ！後ろの連中も半分近くやられちまった！このままじゃ俺たち…」

【盗賊B】
「うるせぇっ！わかってるよ、んなこたぁっ！」

などと言い争っているところに…空を切るような鋭い音を鳴らして、一本の矢が…

【盗賊B】
「ぐぇっ！」

それは見事に、大声で怒鳴っていた男のこめかみを射抜いた。

【盗賊C】
「ひぃっ！」

見れば、凛とした瞳でこっちを睨む、青い髪の女性の姿が…さらに、

【春蘭】
「でぇぇぇいっ！」

【季衣】
「はあああああっ！」

裂帛の気合いと共に、轟音を響かせ敵を薙ぎ倒す、春蘭と季衣…彼女たちの周りには、盗賊たちの屍が積み上がっている。

【春蘭】
「ふん、他愛ない。やはり正面から叩き潰せばよかったではないか。」

【季衣】
「まぁまぁ、春蘭さま。でも、ついさっきまであんなにいた盗賊たちが…いつの間にこれだけに？」

【秋蘭】
「…蒼馬…ヤツしかいまい。」

秋蘭の言葉に、二人は「あ～…」という顔で納得した。

【盗賊G】
「ひーっ！ダメだ、逃げろっ！」

【盗賊F】
「こんな奴らに勝てっこねぇよ～…」

盗賊たちは、我先にと四方八方へ逃げ散らばる。

【春蘭】
「なっ、待てっ！」

一人たりとも逃がしてはならない。春蘭たちは追撃をかけようとしたが、蜘蛛の子を散らす勢いで逃げる盗賊たちに、手を焼かされる三人。

【蒼馬】
「仕方ないねぇ～。華琳、彼らは一人残らず殺しちゃっていいんだね？」

【華琳】
「え、えぇ。」

【蒼馬】
「了解♪じゃあ、もう一働きしようかねぇ～。」

蒼馬の姿がまた消えた…後には、砂埃が少し舞い上がった。

【盗賊C】
「へ？」

盗賊の一人が背筋に寒いものを感じた…瞬間、彼の首は飛んでいた。次の瞬間、また別の方に逃げていた男たちが、首のない姿で地面に転がった。また、次の瞬間には…反対側に逃げていた男が、左右の景色が縦にずれるという奇妙な光景を目にし、真っ二つにされて地面に横たわった。

【盗賊E】
「ま、また出たぁっ！」

【盗賊H】
「ぎゃああっ！助けてくれぇっ！」

【盗賊I】
「か、母ちゃーんっ！」

逃げ惑う盗賊たち…しかし、彼らを取り囲むようにして軍は動き始めていた。

【蒼馬】
「一人も逃がさないよぉ～。」

もはや、盗賊たちの恐怖のみが戦場を支配していた…。
そんな戦々恐々とした事態を深めるが如く、蒼馬は突き出した自身の右手の人差し指に神通力を込めた。

【蒼馬】
「…ランス。」

その指先から一直線に伸びる光…その一筋の光は、反対側で逃げようとしていた盗賊の一人を、後頭部から額に掛けて貫いていた。

【盗賊D】
「……っ…」

やられた男は、ビクビクと体を痙攣させながら、すでに白目を剥い

て絶命していた。

【盗賊H】
「ひぃっ！」

【盗賊I】
「いやだぁっ！死にたくねぇよぉっ！」

誰にともなく命乞いを始める盗賊たち…彼らも元々は、貧しい農民だったのだろう。腐敗した国政の、彼らもまた被害者なのだ。盗賊たちの哀れな姿に、兵士たちが僅かな躊躇を滲ませるその横から、容赦のない蒼馬の追い打ちがかけられる。

【蒼馬】
「今さら謝っても、ダメだよ～。」

蒼馬は瞬脚であっちへこっちへと跳び回り、逃げ惑う賊どもを次から次へと殺し回った。飛び散る鮮血…しかし、蒼馬の鎧には一滴の返り血も付着していなかった。

【華琳】
「…この光景は何？」

【桂花】
「華琳様？」

【華琳】
「虐殺と言っていいくらい、圧倒的じゃない…」

今、華琳の目には蒼馬がどう映っているのだろうか…彼を引き入れ

た事を、どう考えているのだろうか。
…数分後…盗賊たちは一人残らず、物言わぬ屍の山と化した。

【蒼馬】
「ふぅ〜い…終わったかなぁ。」

別に汗もかいてない額を腕で拭い、わざとらしい溜め息を吐いて蒼馬は華琳のもとに戻ってきた。

【蒼馬】
「こんなんで良かったのかい？」

【華琳】
「え、えぇ。ご苦労だったわね、蒼馬。」

【蒼馬】
「じゃあ、おじさんは適当に休んでるよぅ。年甲斐もなく暴れ回って、疲れちゃったからね。」

言い残して、蒼馬はまた姿を消した。
それから少しして、春蘭、秋蘭、そして季衣の三人が集まってきた。

【春蘭】
「華琳様！ご無事ですか！」

【秋蘭】
「落ち着け姉者、こっちにはまるで賊たちの死体がない。怪我をする方が難しいと思うが？」

【華琳】

「秋蘭の言うとおりよ、春蘭。大事ないわ。お疲れ様、二人とも。」

【春蘭&秋蘭】
「「はっ！」」

【華琳】
「それに、季衣も…よくやってくれたわ。ありがとう。」

【季衣】
「…これで…」

季衣は少し俯き気味の顔を上げて、彼女にしては弱々しい、小さな声で言葉を紡いだ。

【季衣】
「これで、もう…盗賊に襲われずに、済むんですよね？村のみんな、安心して暮らせるんですよね？」

【華琳】
「えぇ。」

【季衣】
「よかった…っく、ひっく……」

安堵したのだろう…緊張の糸が切れた季衣の目からは、止めどなく涙が溢れ出した。
そんな季衣の事を、春蘭は優しく抱きしめてやった。

【春蘭】
「よく頑張ったな、季衣。」

【季衣】

「う、うわぁぁぁぁん！」

泣きじゃくる少女を抱きしめながら、春蘭はその体の小ささに改めて気付かされた。こんなに小さな体で…今まで、たった一人で村を守っていたのかと思うと、春蘭の胸にも込み上げてくるものがあった。

その後、賊討伐の功により、華琳は州牧となった。より広い地域を治める事になったので、季衣の村も晴れて彼女の統治下におかれる事になったのである。

第九話　死神、街を守る

季衣が仲間に加わり、華琳が州牧となってから早数日…蒼馬は、兵士たちの鍛練を任されるようになっていた。

【蒼馬】
「はい、全隊右に方向転換。駆け足ね…太鼓を鳴らしたら反転、そのまますぐに前進だよぅ。」

数百人の兵たちが一斉に動く…太鼓が鳴ると同時に、各自がその場で反転し、先程まで後方側だった列から順次前進を開始する。
その後も指示は増え、陣形の組み替えも一通りやらせたところで、団体訓練は終了にした蒼馬。

【蒼馬】
「じゃあ、こっからは個人単位の訓練だねぇ。各自二人組になって、徒手格闘戦の訓練をして欲しい。訓練だから、相手に怪我をさせないように…また、自分が怪我をしないように集中して臨むんだよぅ。」

とぼけた喋り方だが、彼の実力を先日の戦で見せられた兵たちにとっては、彼の言葉は絶対である。逆らえば命はない…事実、最初の訓練で、彼の話し方に気を緩めた兵士の一人が、真面目に訓練を受けずにいると…

【蒼馬】
「そんな調子だと、死ぬよぅ？」

と、蒼馬が剣を一振りさせたのだ。瞬間、訓練場に走る戦慄…男は

腰を抜かし、その場で失禁してしまった。別に何も誰も斬られてはいなかったが、彼の剣閃は味方にまで相当な恐怖をすりこんでいたようだ。

【蒼馬】
「君一人が死ぬくらい、おじさん別にいいんだけどねぇ～？でも、そのせいで他の兵が巻き込まれて、みんなが危険な目に遭うかもしれないでしょう？分かるかい？戦場っていうのは、そういう場所なんだよぅ？」

それ以来、蒼馬の立場は否応なく高まった。少なくとも、周りの兵士たちの対応という意味では。
そんな中、蒼馬は華琳に呼び付けられた…。

【蒼馬】
「何だい、華琳？おじさん、兵士のみんなに稽古つけてあげてたんだけど～？」

【華琳】
「それなら、代わりに春蘭に頼んだわ。」

【蒼馬】
「そう。それで、用件は～？」

話を促すと、華琳から一つの竹簡を渡された。中を読んでみると…街の警備の在り方についての見直し、その草案となっていた。草案…といっても、ほとんど白紙だ。

【華琳】
「それを纏めて欲しいのよ。」

【蒼馬】
「おじさんが？おじさん、しがない一兵卒だよぅ？」

【華琳】
「いいえ。もう貴方はれっきとした我が軍の将よ。兵たちも認めているわ。」

【蒼馬】
「え、そうなのかい？」

蒼馬は、つい先日まで直属の上司だった秋蘭に回答を求めたが、彼女は無言で一つ首を縦に振るだけだった。

【華琳】
「ま、そういうわけだから、よろしくね蒼馬。期限は…三日でいいかしら？」

【蒼馬】
「うーん…分かったよぅ。仕方ない、じゃあ現場を見に行きますかねぇ～。」

蒼馬は以外にあっさりと引き受け、部屋を後にした。

【華琳】
「あらら、随分とあっさり請け負ってくれたけど、大丈夫なのかしら？」

【秋蘭】
「さぁ…何しろ、蒼馬のことですから、判断しかねます。」

【華琳】
「よねぇ…ま、楽しみにしていましょう。」
華琳は心底楽しそうにほほ笑むと、仕事に意識を戻した。

早速、街に繰り出した蒼馬だったが、活気溢れる街の人気に、少々当てられ気味だ。

【蒼馬】
「ふぅ～…考えてみたら、おじさんこういうとことは無縁な生活だったからねぇ～。」

トレジャーハンターという、かなり特殊な仕事で生計を立ててていた彼にとって、馴染みのある店というのは大概が闇市など表立って商いの出来ない店ばかり。
この世界に来る前に立ち寄っていた智輝の所だって、かなり特殊な取引先だ。

【蒼馬】
「でも、人が多ければ当然…」

【？？】
「食い逃げだぁーっ！」

早速、騒ぎが起きた。

【？？】

「誰か、そいつを捕まえてくれっ！」

蒼馬が振り向くと、通りの向こうから駆けてくる男が一人…その後ろから、包丁を持った男が追いかけて来ていた。

【蒼馬】
「はぁ～、物騒だねぇ。」

そう言って、蒼馬は食い逃げ犯と思しき男の前に一瞬で詰め寄った。

【食い逃げ犯】
「なっ！」

【蒼馬】
「ダメだよ～、無銭飲食は～。」

【食い逃げ犯】
「くそっ！」

男は蒼馬を避けて行こうとするが、次の瞬間その首を掴まれて、地面に叩きつけられた。

【食い逃げ犯】
「がっ！」

【蒼馬】
「ふぅ～。全く困っちゃうねぇ～。」

それから遅れる事１０分以上…やっと警邏隊が駆け付けた。

【蒼馬】
「やぁ、遅かったねぇ～。」

【警邏隊員A】
「あ、あなたは、蒼馬将軍！」

【警邏隊員B】
「お疲れ様です！」

【警邏隊員C】
「ご助力、感謝いたします！」

警邏隊の兵たちは、蒼馬の姿を見るなり一様に敬礼した。本隊ではないが、彼らも蒼馬の事は聞き及んでいるのだ。

【蒼馬】
「うん、それはいいんだけどさ～、ちょっと聞いていいかい？」

【警邏隊員A】
「はっ！」

【蒼馬】
「君たちの詰め所は、どのくらいの間隔であるんだい？」

【警邏隊員A】
「四町から五町です。」

【蒼馬】
「うわ、遠いねぇ～。実は、街の警備について、改善案を作るよう頼まれてね。何か、困ってる事とかあるかい？」

【警邏隊員A】
「はぁ…将軍も仰られた通り、詰め所の間隔が遠く、我々が現場に駆け付ける頃には、すでに騒ぎが収まっていたり、最悪の場合には手遅れという事が度々あります。それに、警邏隊はなり手が少なく、人手も不足しているんです。故に詰め所の数も少なく、仕事は厳しい…それが原因でなり手は増えない、これの悪循環なんです。」

【蒼馬】
「なるほどね～。」

それを聞き、蒼馬は顎に手を当ててしばし思案した…人手不足。どうやら、まずはそこを解決しないといけないようだ。
といっても、蒼馬はすでにその点は予測していた。

【蒼馬】
「なら、やっぱり本隊の兵をこっちに回してもらうよう頼んでみようかね～。いや、待てよ…それよりも……さっきの、食い逃げ犯と話してみてもいいかい？」

【警邏隊員A】
「は？しかし…」

【蒼馬】
「ひょっとしたら、君たちの待遇なんかも改善できるかもしれないからね～。協力してくれると助かるんだけどな～。」

【警邏隊員A】
「わ、分かりました…」

こうして、蒼馬は先の食い逃げ犯と話をするべく、彼が連れて行かれた詰め所へと向かった。

翌日の夕刻…蒼馬は華琳の部屋を訪ねた。その手には、ひと巻の竹簡が抱えられている。

【蒼馬】
「華琳、少しいいかい？」

【華琳】
「蒼馬？えぇ、入りなさい。」

中に入ってみると、華琳は政務用の机で山ほどある書簡を整理していた。

【蒼馬】
「大変そうだねぇ～？後にした方がいいかな～？」

【華琳】
「平気よ。ほとんど目を通し終わったものばかりだから。」

その割には、彼女の顔に疲労の色は見えない。さすがは覇王・曹孟徳…その能力の高さは、凡人では比較にもならない。

【華琳】
「それより、何の用かしら？」

【蒼馬】

「何って、例の警邏隊の改善案を纏めたから、目を通して貰おうと思ってね～。」

【華琳】
「は？」

華琳の表情が、訝しげに歪む。

【華琳】
「それを頼んだのは、昨日だったわよね？まさか、一日で仕上げたっていうの？」

【蒼馬】
「昨日のうちに、現場の声なんかを聞いて回ったからね～。それで、今日それを参考に書簡を纏めた…残りの一日は、これがダメだった時に備えて、とっておこうと決めてたからねぇ～。」

【華琳】
「……」

華琳は、目の前のとぼけた様子の男をまじまじと眺めた。
正直、華琳は三日という期限を、丸三日…ないし三日後という意味合いで設けたつもりだった。それでも、このヘラヘラと笑ってばかりで真剣みの欠片もない男なら、間違いなく提出が遅れるだろうと踏んでいた。それなのに、あろう事か蒼馬はその期日を三日以内と捉え、しかも一日残して仕上げてきたというのだ。

【華琳】
「そう…分かったわ。見せてちょうだい。」

【蒼馬】
「はい、これだよ～。」
受け取った竹簡を開き、華琳はスラスラと目を通していった。
多少、字に癖が見られたが、むしろそれは達筆と捉えてもいいもので、少なくとも彼女にとって読みにくい、いわゆる下手くそな字ではなかった。文章も纏まっている…。
内容は要約するとこうだ。
まず問題点が、詰め所の数と間隔である事。詰め所の数を増やし間隔を埋める事で、街の何処で事件が起きても素早く警邏隊を派遣し、対応できるようにすべきという事。理想は一町に詰め所一つ、と補足されている。
その為に解決すべき真の問題点は、警邏隊の人手不足だという事。
その点を解決するための案として…警邏隊の待遇を上げて、なり手を増やす必要があるという事が、前置きとして書かれていた。
具体的な案はこの後に記されている。正規軍から人手を回してもらい、警邏隊の負担を軽減させる。警邏隊に入れば、兵役や雑役を免除されるなどの利点を作る。これでなり手を増やす。特に、流れてきた者たちの中には、職に就けず困っている者が多いので、彼らを優先的に雇用する事で、治安の改善と人の呼び込みも期待できる。
まずこれで人手不足を解決する。
しかし、ここで新たに浮上するのが、資金面の問題である。それについて蒼馬は、こう記している。
警邏隊の体制が改善され、治安が良くなれば、他の商人仲間や商団を呼んでもいいと考えている商人たちがいる。そうなれば、商業の発展で税収を増やす事が可能になる。また、出資を前向きに考えてくれている人たちが大勢おり、資金面についての解決も難しくはないとの事。
さらに、問題解決とは別の改善案も補足されていた。それは…

【華琳】
「正規軍の新兵と共に、警邏隊にも同様の調練を施す…なるほどね。」

あらかじめ正規軍の調練を施しておけば、もし警邏隊から正規軍に移るとしても、移籍はスムーズに運ぶだろう。志願者には紹介状を書くようにすれば、警邏隊からの出世を夢見て、さらになり手は増えるだろうし、正規軍にも優秀な兵を入れられる。

【蒼馬】
「それに、兵役の免除もある。原則、彼らを徴兵出来なくなっちゃうからねぇ～。その分のこっちの利益を考えたんだよぅ。どうだろう？有事の際は彼らを街と城の守備部隊に回すって事でどうかなぁ？このくらいで、割に合うといいんだけど～。」

警邏隊が守備部隊として機能するなら、遠征の際に正規軍から守備に回す分を軽減できる。それが、蒼馬の考えた作戦だ。
華琳は改めて考慮した。蒼馬の案は、問題点とそれに対する解決案が見事に整理されていた。単なる警邏隊の改善案だが、そこにはきちんと富国強兵に繋がる部分が盛り込まれている。

【華琳】
『これを…たった一日半で？』

【蒼馬】
「何か問題でもあったかい？」

【華琳】
「いいえ。案自体は悪くないし、これで行きましょう。」

【蒼馬】
「ふぅ～ぃ。そいつは良かったよ～。出資の約束なんかも取り付けておいたから、無駄にならず済みそうだね～。」

【華琳】
「…ちょっと、待って？出資の約束？」

華琳の顔が途端に厳しくなる。

【蒼馬】
「まぁね～。食い逃げ犯を捕まえた礼に、この案が通ったら幾らか出してもいいって、大衆食堂の店主くんが。他にも…」

【華琳】
「…それはね、蒼馬。計画の立案じゃなくて、計画実行の根回しっていうのよ！」

【蒼馬】
「ん？あぁ、そうとも言うねぇ～。」

華琳は我慢ならず、思いきり蒼馬の腹を蹴り飛ばした。

ドガンッ

【蒼馬】
「あれぇーっ？」

【華琳】
「全く、少しは反省の色くらい見せられないのかしら？」

【蒼馬】
「ゴメンよ～。そこまでは、おじさんも考えてなくって～。」
蒼馬の態度に、華琳は溜め息を吐くしかない。
一応は蹴り飛ばせたものの、壁に激突してなお平然としている蒼馬…おそらく何をされても、痛くも痒くもないだろう。

【華琳】
「…蒼馬、この件は今後、全てあなたに任せるわ。根回しまでした以上、責任は最後まで取ってもらいますからね！」

【蒼馬】
「ふぅ～、仕方ないね～。んじゃ、まずは詰め所を設ける場所を確保しないとね～。明日から忙しくなるな～。」
そんな事を言いながら、蒼馬は華琳の部屋を後にした。

【華琳】
「……くくく、あはははっ！」
一人になった華琳は、やがて愉快そうに笑い出した。

【華琳】
「最高じゃない！武は死神の如く、戦場の兵を等しく戦慄させる上に、たった一日で計画の立案はおろか、根回しまで出来る仕事の早さ…蒼馬、彼がいれば、わたしの覇道は揺らがない！後は、時が満ちるのを待つのみ！くくく、あはははっ！」

華琳が少し発狂しかけた（？）その日から、三日後…蒼馬は警邏隊改めて警備隊の入隊者たちの名簿をチェックしていた。何処の生まれ、家族の有無、住んでいる家、経歴などを記載したそれらは、その数すでに数十人分にのぼっていた。

【蒼馬】
「とりあえず、雇える人間は雇い尽くしたかな～？後は、これから希望者が増えてくれれば…詰め所を建てる場所も押さえたしね～。」

と、そこへ秋蘭が訪ねてきた。

【秋蘭】
「順調なようだな、蒼馬。」

【蒼馬】
「やぁ～、秋蘭ちゃん。」

【秋蘭】
「まさか、こんなにも迅速に事が進むとは…失礼ながら、予想もしていなかった。」

【蒼馬】
「伊達に、六百年も生きてないよ～。」

数日前までは、直属の部下と上司の間柄だった事もあり、秋蘭はある程度だが蒼馬との接し方が分かってきていた。
なんて事はない…深入りしなければいいのだ。
彼がどういった人間で、どんな過去を歩んできたのか…聞いたところで理解も出来ないし、その内容を信じきれる自信もない。ならば、今はただ味方として彼を信じ、共に華琳の覇道を支えていけばいい

…彼がどんな態度でいようと、華琳のために協力してくれているのは事実なのだから。

【秋蘭】
「そうか。それより、華琳様がお呼びだ。玉座の間に来てもらえないか。」

秋蘭に連れられ、蒼馬は玉座の間へと通された。

【華琳】
「来たわね、蒼馬。」

【蒼馬】
「何か用かい？おじさん、今は警備隊の事で手一杯なんだけど～。」

相変わらずの態度と口調だ…集まっていた春蘭と桂花など、烈火の如く怒り狂っている。華琳の親衛隊長となった季衣は、今やいつかなる時でも華琳の横に控えているので、隣にいる華琳のご機嫌が悪くならないよう祈るばかりだった。

【華琳】
「分かっているわよ。あまり時間はとらないから心配しないで。」

まぁ華琳も、蒼馬の態度については今さら何も言わないし、気にもしなかった。

【華琳】
「蒼馬。今日から貴方を、正式な警備隊隊長に任命するわ。この街の平穏を守る者たちを、その手で束ねてもらうわよ。いいわね？」

華琳の言葉に、誰よりも驚いたのは蒼馬だった。

【蒼馬】
「隊長？おじさんがぁ？」

それはそうだろう…自分が周りからどう言われているか、いくらすっとぼけている蒼馬でも、知らないわけがない。

【蒼馬】
「街の人が怖がらないかい？死神なんて呼ばれてるんだよ、おじさん…」

【華琳】
「あら、自覚があるのね？でも、考えようによっては、それだって利用できるでしょ？」

確かに、死神が束ねる警備隊に守られている街で、誰が好き好んで悪事を働くだろうか。

【蒼馬】
「ふぅ～…まぁ、いいよ～。引き受けようじゃないの。でもぉ、それなら少しかお給金上げておくれよ～。部下に食事も奢ってやれないんじゃ、カッコ悪いでしょ～？」

【華琳】
「あら？体裁を気にするのは青い証拠、じゃなかったかしら？」

それは、前に蒼馬が華琳に対して言った言葉だった。

【蒼馬】

「あっはっは♪そうだったねぇ～。」

【華琳】
「ま、いいわ。今後とも貴方にはしっかり働いてもらいますからね。給金については、考えておくわ。」

【蒼馬】
「助かるよ～。それじゃあ…警備隊隊長の任、謹んで受け賜りまする。」

蒼馬は、華琳の前で初めて叉手の礼をとってひざまずいた。

【華琳】
「そ、蒼馬…貴方…？」

【蒼馬】
「ん？何か間違っていたかい？」

と、いつもの調子で返す蒼馬…いつもすっとぼけた様子の彼だが、やはりというべきかフリをしていただけだった。

第十話　御遣いと大徳の、忙しい太守生活？

盗賊たちを討伐し、町の英雄となった一刀たち。あの後、一刀と桃香は、逃げ出した太守に変わり、近隣の地域を治める新しい太守となった。

しかし、太守と一口に言ったって、小さな町を幾つか治めるだけ…土地も人口も決して多くはない。財源だって…決してゆとりがあるわけでもない。それでも、町の人たちからの要求は上がってくるし、土地の開墾や市の拡大もしなければならないわけで…一刀と桃香は、大変な毎日を送っていた。

【一刀】

「ふんっ……はぁーっ。」

一刀は大きく伸びをしてから、政務机に突っ伏した。その両脇には、山のように書簡が積み上げられている。

【桃香】

「大丈夫？ご主人様？」

桃香が心配そうに尋ねるが、彼女の目の下にもくまが出来つつあった。

【一刀】

「無問題…」

すぐに起き上がった一刀は、新しい書簡に目を通し始めた。

【一刀】

「明日は朝から、長老さんたちとの会談があるんだ。溜まっているこの仕事を片付けておかないと、本当に政務が立ち行かなくなる…」

毎日毎日上がってくる陳情書やら何やら…それはもう山のように、毎日二人の前にそびえ立つのである。その日のうちに処理できなければ、どんどん未処理になる分が増えていき…終いには、こういう現状に至るわけである。

【桃香】
「……」

【一刀】
「…桃香？」

【桃香】
「ふぇっ？ね、寝てない！寝てないよ！」

それは、完全に寝ていたと自白しているようなものだ。

【一刀】
「少し寝ておけ、桃香。明日に差し支えるぞ？」

【桃香】
「だ、大丈夫だよ！ご主人様こそ、寝なくていいの？」

ここ最近の二人の睡眠時間は、平均すればどっこいどっこいだ。

【一刀】
「俺はまだ平気だ。そうだ…二人で交代しながら少しずつ仮眠をとればいい。少し休むだけでも、作業効率はだいぶ違うからな。」

【桃香】
「そうかなぁ～？でも～…」

【一刀】
「後で俺もちゃんと休むよ。いいから、心配しないでやすんでなさい。」

【桃香】
「うん。ありがとう、ご主人様。」

一刀の優しい笑顔に癒されながら、桃香は少しの間だけ眠りに就いた…。

【桃香】
『えへへ…やっぱり、ご主人様は凄いな…強くて、優しくて、頼もしくて…カッコよくて…』

ピロリロリーン…桃香の好感度が上がりました。

【一刀】
「…よし。俺も、もう一頑張りだ。」

一刀は自身に気合いを入れ直し、山のような書簡に挑んでいった。

チュンチュン　チチチ…

小鳥の囀り、窓から差し込む朝日の眩い光…いつの間にか、朝を迎

えていた。

【桃香】
「…ん…ん？」

硬い机の上に突っ伏していた頭を上げ、ぼーっとした目で状況を確認する…徐々に目が覚めてくると同時に、頭から一気に血の気がひいていく…顔面蒼白どころか、肩まで青白くなりそうな勢いだ。

【一刀】
「おはよう、桃香。」

【桃香】
「ご、ご主人様！ごめんなさい、私…」

慌てまくる桃香…当然だ、あれからずっと寝てしまっていたのだ。仮眠のつもりが朝までぐっすり…なんて、全く笑えない話だ。一人で黙々と仕事を続けていた一刀は、さぞかしご立腹だろう…と思いきや、そんな様子は微塵もない。

【一刀】
「ゴメン、桃香の寝顔があんまり可愛かったから、起こすに起こせなくて…」

【桃香】
「え、えっ！」

ボッという音と共に火が出そうな勢いで、桃香の顔に赤みが戻ってきた。実際、湯気ならたっていた。

【桃香】
「も、もう…ご主人様のバカ…」
真っ赤になって照れながら、桃香は生まれて初めて暴言ととれる言葉を口にした。
…おや？桃香の好感度の様子が……おめでとう！桃香の好感度は愛情度に進化した。

【桃香】
「あ、あれ？ご主人様？溜まってたお仕事は…？」

【一刀】
「だいたい終わった…後は、これだけだ。」
そう言って、一刀は最後の書簡を処理済みの山に置いた。綺麗なピラミッドがそこには建っていた。

【一刀】
「…これは、俺の墓標だな。」
誇らしげに、普段の数倍爽やかな笑顔で、何か意味の解らない事をのたまい出した。みんな、お気づきだろうか？

【桃香】
「えぇっ？もしかして、これ全部、あれから一人で？」

【一刀】
「あぁ。天使のような桃香の寝顔を見つめていたら、何だか力が湧いてきてさ。自分でも信じられないよ。はっはっは♪」

【桃香】
「ほぇっ！」

真っ赤になってしまう桃香…一刀の様子に気づく余裕はない。
と、ドアがノックされ、愛紗が執務室に入ってきた。

【愛紗】
「ご主人様、桃香様も…やはりこちらでしたか。お部屋にお迎えに上がっても、二人ともおられなかったので…どうなさいました？」

さすがは忠臣、愛紗は二人の様子が変な事にすぐに気づいた。
桃香は唐辛子のように真っ赤になって、頭から湯気をたてて俯いているし…一刀は一刀で、目の下の尋常じゃないくまを除けば、まるで少女マンガに出てくるイケメンヒーローみたくなっている…周りに花でも咲かせていそうな感じだ。

【愛紗】
「ご主人様？どうし…」

【一刀】
「おはよう、愛紗。今朝の君は、いつにも増して美しいよ。」

【愛紗】
「はぁっ？な、な、ななっ！何を…」

一瞬にして、愛紗も桃香と同じような状態になってしまった。
朝から、ピンク色の空気に包まれてしまう室内…寝不足で壊れてしまった一刀は、絶賛暴走中だ。このままでは…

【一刀】

「戦場での凛々しい姿もいいけれど、照れてる顔もカワイイよ、愛紗。」

そんな歯の浮くようなセリフを噛まずに言いながら、一刀は愛紗に詰め寄る。

【愛紗】
「や、あの…ご主人様…ふぁっ！」

一刀の手が、愛紗のうなじへと回され…束ねられた流れる黒髪を梳きながら、指を滑らせていく。艶のある髪は一度も絡むことなく、スッと一刀の指を受け流した。

【一刀】
「綺麗な髪だ…こうして梳くだけで、幸せな気分になれるよ。」

【愛紗】
「だ、ダメです…ぁぅ…」

こ、このままでは、本当に危険な気がする…こ、こういう時は…

【愛紗】
「い、いけません！ご主人様っ！」

どんっ

【一刀】
「うわっ！」

バタンッ　ゴンッ

【一刀】
「…Q〜〜…」
愛紗に突き飛ばされ、転んで頭を打ち気絶してしまった一刀…お約束的展開というのは、実に使い勝手がいい。
と、一刀が気絶した事で、おかしくなっていた部屋の空気ももとに戻った。

【桃香】
「…あ、あれ？ご主人様？」
桃香は我にかえった。

【一刀】
「…いてて…」

【愛紗】
「はっ！ご、ご主人様！申し訳ありません！」
愛紗も正気に戻り、自分がしでかした事に顔を青ざめる。

【一刀】
「だ、大丈夫…今のは、俺が悪かった。反省してる。」
後頭部にタンコブを作りながらも、無事に起き上がってきた一刀…どうやら彼も正気に戻ったらしい。

【一刀】
「さてと…したら、町の人たちとの会談に向かおうか。」

【愛紗】
「ご主人様、無理をなさらないで下さい。フラフラじゃないですか！」

愛紗の言うとおり、一刀は足元が覚束ないのか千鳥足だ。二、三歩歩いただけで膝がカクンとなってしまう。

【一刀】
「うぅ…さすがに徹夜明けじゃ無理か…桃香。」

【桃香】
「は、はい。」

【一刀】
「会談の方は任せた。俺は、部屋で少し休んでから行くよ…」

そう言って、一刀は足を引きずるようにして部屋を出て行こうとする。疲れで重くなっていた体が、その時フッと軽くなった気がした。というのも、

【愛紗】
「危なっかしい方です。部屋までお送りします故、ちゃんとお休みになって下さいね。」愛紗が、体を支えてくれたからだ。そのまま肩を貸し、一刀を部屋まで送り届ける愛紗…戦場の彼女とは結び付かないほど、その体は華奢で柔らかく、女の子特有の甘い香りがした。
ただでさえ限界まで疲れている一刀にとっては、ムラっ気を起こさないようにするのは大変な忍耐力を要したわけだが、とりあえず今回のところは辛くも眠気が勝ってくれたようだ。

部屋に着き、寝台に横になった一刀の瞼は…もう限界だった。

【一刀】
「…ありがとう、愛紗…」

【愛紗】
「いえ。家臣として、当然の勤めです。」

【一刀】
「…すまないが、桃香を頼む……彼女一人では不安だ。」

【愛紗】
「元よりそのつもりです。ご心配なさらず、ゆっくりお休み下さい。」

一刀は意識を手放し、深い眠りに就いた…しばらくは起きれないだろう。

会合は、町の長老の家で行われていた。
徹夜の政務でダウンした一刀の為にも、町の人たちとの会談を成功させたい桃香。だが、現実はそんなに甘くはない…というより、性根の優しい桃香に、この役割は荷が重かったかもしれない。

【長老】
「ワシらとしても、玄徳様が掲げる大願成就の日待ち望む気持ちは同じですじゃ。」

【愛紗】

「『しかし』と、続きそうな物言いですね。長老殿。」

町の長老であるお爺さんの言葉に、すかさず愛紗が口を挟む。見方によっては、威圧的にも見えるが…いや、実際それもあるのだろう。間違っても、和気藹々とした話し合いをしに来たわけではないのだから。

【長老】
「誤解しないでいただきたい。ワシらは…」

腹の探り合い…そう、これは駆け引きなのだ。如何にして自分たちの要求を通すのか…その為に呑む条件は、出来るだけ少ない方がいい。桃香にとって、これほど向かない役目もないだろう。

【桃香】
「い、いえ…私たちもですね、無理を強いるわけじゃなくて…」

【愛紗】
「違います、桃香様。」

【桃香】
「う…」

愛紗にぴしゃりと言われてしまい、口を噤むしかない桃香…終始こんな調子なのである。

【愛紗】
「そこを繕わないでいただきたい。私達は、無理を強いに参ったのです。」

愛紗の言うとおりだった。ここで言い繕ってしまったら、それは完全に偽善だ。
自覚が必要なのだ…民に無理を強いる事も、強いらなければならない現実も…。

【桃香】
「…ごめんなさい…」

見る間に萎んで、小さくなってしまう桃香…まるで風船の空気を抜くような勢いだ。

【長老】
「玄徳様は、少し優しすぎますな。」

【桃香】
「え？」

【長老】
「玄徳様の掲げる大願、それは一万人、百万人の人たちを救うもの…一兵卒の死や、爺の貧困に胸を痛めているようでは、とてももちますまいて…」

【愛紗】
「言うな、長老殿。それが、桃香様というお人だ。」

褒められているのかどうか、判断に困るが…とりあえず桃香の人となりは、長老や町の人たちから好感を持たれているようだ。

【愛紗】
「長老殿、私達としては…」

【桃香】
「待って、愛紗ちゃん。」
愛紗の言葉を遮る桃香…ここに来て初めて、愛紗より前に出た桃香は、長老や町の人たちに対し深々と頭を下げた。

【長老】
「玄徳様！」

【愛紗】
「…桃香様、軽々しく民の前で頭を垂れては…貴方は、今やこの町の…」

【桃香】
「分かってる。でも、私にはお願いする事しか出来ないから…無理を言ってる事は、承知しています。たくさん、迷惑をおかけしている事も…それなのに私、また皆さんに甘えようとしています。」
普段、ほわほわしている桃香だが、己の非力さだけは…痛いほどに自覚していた。
だが、彼女は決して、無力なわけではない。例え、一刀のように王の覇気を持たずとも…彼女には、彼女に相応しい力が備わっていた。

【桃香】
「…この町を守るためにも、力を貸して下さい。たくさんの人が、傷つくかもしれません…命を落とすかもしれません…それでも、皆さんの平和への願いが、私たちの力です。」
それは、ある意味では王の覇気をも凌ぐであろう力…だが、彼女に

はまだその自覚がない。それに、その力が真に目覚める確率は極僅かだ。
それでも…

【長老】
「…血が沸き立つようではないか…なぁ？皆よ。」

長老も、集まっていた町の人たちも、桃香の言に感激したのか涙を流している。

【長老】
「玄徳様は、ワシらのような小汚い民の思いを、力に変えて下さるという…必要として下さるという…あまつさえ、こんなワシらに対し、頭まで下げて真摯に向き合って下さった…こんなに嬉しい事があろうか。」

【町民A】
「はいっ！」

町の若者たちも同意する。

【長老】
「このような老いぼれでも、まだまだ鍬くらい握れますわい。」

【愛紗】
「感謝する、長老殿。」

その後は、幾つかの町の皆からの要請に応える形で、会合は無事に終了した。
桃香はと言えば、無意識のうちに力を使って、へとへとになってし

まったようだった。

【桃香】
『…うぅ、何でだろう…何か、もの凄く疲れたよぉ～……』

そんな会合の様子を、家の外から覗く人影があった。

【一刀】
「…心配で見に来たけど…大丈夫みたいだな。」

他でもない。まだ少し目の下にクマの残る一刀である。

【一刀】
「俺の出る幕は無さそうだし、帰ってもう少しだけ休ませてもらうかな。」

そう言い、帰ろうした一刀だったが…

【？？】
「あ、あの！」

【一刀】
「ん？」

可愛らしい声に呼び止められた。振り向くと、これまた可愛らしい二人の少女がそこに立っていた。
丸い帽子をかぶった金色の髪の少女と、とんがり帽子をかぶった銀色の髪をした少女だ。一刀の顔を見上げ、おどおどビクビクしているこの二人の正体は？次章に続く。

【鈴々】
「うー、鈴々の出番が無いのだぁっ！」

一刀好感度
鈴々４→３（－１）

愛情度
愛紗１．１→１．３
桃香１．０→１．２

第十一話　伏龍鳳雛、御遣いの下に降り立つ

【一刀】
「こんにちは。俺に何か用かい？」

見るからに緊張した面持ちで、自分の事を見つめている二人に、一刀は出来るだけ優しい笑みを浮かべて問いかけた。

【？？】
「は、はわわっ！」

【？？】
「あわわっ！」

…何故か、余計に緊張させてしまった。

【一刀】
「あぁ、こんな顔でごめんよ。最近、寝不足でね…」

別に人相の悪さに驚いたわけではないと思うのだが…まぁ、当人が納得しているならそれでいいだろう。

【一刀】
「俺は、北郷　一刀。この邑一体の太守みたいな事をやってる…天の御遣いって言った方がいいのかな？」

【？？】
「は、はぅっ！やはりそうでしたか！」

【一刀】
「？」

【朱里】
「わ、わたしは、諸葛孔明といいましゅ！」

【雛里】
「わたしは、あぅ…ほ、ほーとうれしゅ…」

……噛みすぎである。とても愛くるしいのだけれど…何を言ってるのやら。それでも、大事な所は聞き取れたので、一刀は二人を見て驚愕の表情を見せた。

【一刀】
「…伏龍鳳雛…まさか、君たちが？」

希代の天才軍師と称される二人の名を持つ少女たちが、揃って目の前に現れたのだ。驚くなという方が無理だろう。

【朱里】
「あ、あの、わたし達、荊州にある水鏡塾という、水鏡先生の開いている私塾で学んでいたんですけど、でも今のこの大陸を包み込んでいる危機的状況を見るに見かねて、それで、えと…」

【雛里】
「力の無い人たちが悲しむのが許せなくて、その人たちを守る為に、私たちが学んだ事を活かすべきだって考えて、でも自分たちの力だけじゃ何も出来ないから、誰かに協力してもらわないといけなくて…」

【朱里】
「そんな時に、天の御遣い様の噂を聞いたんです。苦しむ庶人を救うべく、天より遣わされた御遣い様…協力してもらうなら、この方しかいない。そう思ったんです。」

もの凄い早口でまくし立てられたので、一刀の方は何を言われているのか半分も理解出来なかった。それでも…真剣な二人の眼差しだけは見てとれた。

【朱里】
「お願いします！どうかわたし達を…」

【雛里】
「御遣い様の幕下にお加え下さい！」

【一刀】
「……」

一刀は呆気に取られていた。まさか、あの伏龍鳳雛の二人が、揃って味方についてくれるだなんて…本来の歴史なら、二人が劉備のもとに来るのは、もっと先の話だ。だいたい、三顧の礼もなしに諸葛亮が味方になるなど、どんな裏ワザや裏コードだ。

【一刀】
「…歓迎しよう、二人とも。今日から君たちは、俺たちの仲間だ。」

【朱里】
「ありがとうございます！姓は諸葛、名は亮、真名は朱里です。」

【雛里】

「せ、姓は鳳、名は統、字は士元、真名は、雛里れしゅ…あぅ…」

【一刀】
「よろしく、朱里。雛里。俺には真名がないから、まぁ好きに呼んでよ。早速、城に案内するな。」
こうして首尾よく、幼女二人を誘拐…失敬、天才軍師二人を陣営に引き入れる事が出来た一刀。

城に戻ってみると、鈴々は兵たちに調練を施していた。兵と言っても、今は百人ほどしかいない。

【鈴々】
「あ、お兄ちゃん！」

【一刀】
「よぅ、鈴々。お疲れ様。」

一刀に気付いた鈴々は、裸足でぱたぱたと駆け寄ってきた。

【鈴々】
「ほえ？お兄ちゃん、この子たち誰なのだ？」

鈴々はすぐに二人に気付いた。見知らぬ少女二人が、一刀の両脇に立っていても、警戒心などまるでない。

【一刀】
「あぁ、そうだな…朱里、雛里、彼女は張飛。うちの将の一人だ。こう見えても、武の腕は一騎当千の勇将だ。」

【朱里】

「は、初めまして！しょかちゅっ…あぅ…」

【雛里】
「ほ、ほーとーでしっ！ひぅ…」

もの凄く痛そうな音がしたのは、気のせい…ではないようだ。口を押さえ、悶絶している…。

【鈴々】
「はにゃ？大丈夫なのか？」

【一刀】
「今のは、かなり痛そうだったな…二人は、諸葛亮と鳳統だ。軍師及び文官として雇う事にした。」

【鈴々】
「そっか。よろしくなのだ♪鈴々の事は、これからは鈴々でいいのだ♪」

早くも自らの真名を預ける鈴々…彼女の辞書に、人見知りという言葉は存在しないらしい。そもそも、辞書なんてあるのかも微妙だが…。

【朱里】
「あ、はい！わたしの真名は朱里といいます。」

【雛里】
「ひ、雛里です…」

年が近い事もあり、すぐに打ち解けた三人。そんな彼女たちの様子

を横で見ていた一刀は、じゃれ合う子犬でも眺めるような目をして、ホクホク顔で癒されていた。

【一刀】
『…ギザカワユす☆』

たぶん、それはもう死語だ。

さて、夕刻になり桃香と愛紗が城に戻ると、全員広間へと集合した。今朝のナンパ一刀くんと違い、瞳にしっかりと王の覇気を宿して凛然としている一刀の姿に、おのずと場の空気も引き締まる。まぁ、そのためだけに、一刀は玉座に座っている気なのだが…。

【一刀】
「桃香、愛紗。町の人たちとの会談、大儀であった。報告は後ほど聞くとして、まずは皆に話がある。鈴々はもう会っているが、今日から働いてもらう文官二人を紹介しよう。」

言って、一刀は両脇に立つ二人を指し示す。それに対し、愛紗が…

【愛紗】
「文官、ですか？」

そんな話は聞いてないと言いたげな表情で尋ね返した。
とはいえ、今朝の一刀を見ている手前、文句も言えなかった。

【一刀】
「あぁ、諸葛亮と鳳統だ。」

朱里と雛里が、ぺこりと頭を下げる。

【一刀】
「二人とも、あの二人が先に話した関羽と劉備だ。互いの自己紹介は後ほど頼む。さて…最近になって勢力を拡大して、黄巾党という賊について、さきほど偵察部隊から連絡が入った。」

一刀のその言葉に、室内の緊張感が高まる。

【一刀】
「規模は一万と少し…街を出て北西十里ほどの所に潜伏しているそうだ。」

【愛紗】
「近いですね。いつ攻めてこられるか分かりません。」

愛紗の心配ももっともだ。そして、攻めてこられたら、今の兵力差ではひとたまりもないのが現実である。

【一刀】
「桃香、話し合いの結果、どれくらいの兵数が集まりそうなんだ？」

【桃香】
「え、と…近くの村や町の人たちの分を合わせても、四千までいかないかな？」

一刀はそれを聞いて、落胆ではなく少しほっとしていた。以前、四倍近い兵数の差がありながらも、盗賊を見事に討伐した実績があったからだ。それに比べれば、決して不可能な数字ではない。

とはいえ、それも策があってのもの…今回も、何か方法を考えなければならない。

【一刀】
「…今回も兵数が足りないんだ。何か策や、地の利を味方につけないと…」

【雛里】
「あ、あの…」

思案する一刀に、雛里がおずおずと声をかける。

【雛里】
「大丈夫、です…」

【一刀】
「？」

【雛里】
「ここから北西にある土地を治める方に、公孫賛さんがいます。彼女は…」

【桃香】
「そっか！」

【雛里】
「ひゃうっ！」

突然の桃香の大声にびっくりして、雛里は涙目になり黙り込んでしまった。うるうるする瞳が、庇護欲を誘う…。

【一刀】
「桃香。」

【桃香】
「うっ、ごめんなさい…」

一刀が非難の目を向けた事で、桃香は一回り以上小さくなってしまった。

【一刀】
「はぁー…公孫賛、確か常山の辺りを治めてるんだっけ？桃香の知り合いか？」

【桃香】
「うん。昔、同じ私塾でお勉強してたんだ。そっかぁ、白蓮ちゃんも頑張ってるんだなぁ♪」

【愛紗】
「つまり、協力を頼もうと？」

【朱里】
「はい。ですが、これは相手の都合もあるので、やはり他にも策は必要でしょう。」

まだ少し涙目な雛里に代わり、朱里が続けてくれた。

【朱里】
「確か、今の話に出てきた場所は、兵法で言うところの衢地となっています。」

【鈴々】
「くち？何なのだ、それ？」
鈴々が頭に？マークを浮かべながら首を傾げる。

【一刀】
「確か…交通の要衝、だったかな？」

【朱里】
「さすがですね、ご主人様。」

【一刀】
「あ、君たちもそう呼ぶのね？」

正確には、各方面に伸びる道が収束、交差している場所の事である。この時代、整備された街道そのものが少ない。なので衢地は、戦略的にも非常に重要な地点なわけで…

【一刀】
「そんな所に、たった一万？」

【朱里】
「故に、敵は雑兵だと分かります。そんな彼らの前に、明らかに数の少ない我々の軍が陳を構えても、全く恐れなどしないでしょう。その警戒心の薄さに付け入るのです。」

【一刀】
「…なるほど…」

一刀は、朱里と雛里の作戦が何となくわかってきたようだ。

【一刀】
「だけど、うまく誘い出したとして、誘い込む場所は？そう都合よくあるとも思えないけど…」

【愛紗】
「どういう事です、ご主人様？」

一刀の言わんとしている事が分からず、疑問符を浮かべる愛紗。

【一刀】
「大軍を相手にするなら、峡間に誘い込むのが常套手段。この間も使ったろ？」

【愛紗】
「なるほど。」

【朱里】
「はわわ…ご主人様、やっぱり凄いですね。」

【雛里】
「あわわ…先に言われちゃいました。」

二人の軍師も同じ事を考えていたようだ。

【朱里】
「でも、心配には及びません。水鏡先生のツテで、正確な地図を見たことがありますから…確か、その地点から北東に二里行けば、川が干上がって出来た谷があったはずです。」

【一刀】
「え？もしかして…記憶してるのか？凄いな…じゃあ、そこに誘い込むんだな？」

【雛里】
「はい。そうすれば、こちらには勇名を馳せる関羽さんや張飛さん、それに天の御遣いであるご主人様もいますから、負ける事はまずないでしょう。後は、公孫賛からの援軍次第ですが…」

【桃香】
「それなら大丈夫♪私が文を出しておくから。」

桃香が自信たっぷりに胸を張った。

【一刀】
「よーし、これで方針は決まったな。各自、明日から準備を進めてくれ。特に桃香、公孫賛殿への協力依頼、頼むぞ。」

【桃香】
「まっかせなさーい♪」

【一刀】
「愛紗、鈴々は兵たちの調練を急いでくれ。ただ、あまり無茶はさせるなよ。」

【愛紗】
「承知！」

【鈴々】

「がってんなのだー！」

【一刀】
「朱里と雛里は、戦に必要な物資の調達なんかを頼めるかな？」

【雛里】
「はい。」

【朱里】
「分かりました。」

【一刀】
「よし、じゃあ今日は解散。みんな、お疲れ様。」

一刀のその一言で、初めての軍議らしい軍議はお開きとなった。
そして、一刀は一人自室へ向かっていた。

【一刀】
「…ふぅー…これで、この戦に勝利すれば、俺たちの名も上がる。
着実に、桃香の理想の実現に近づいているな。…うーん、何か忘れているような…何だっけ？」

ふと、一刀は何かを忘れているような、そんなよくある感覚を覚えた…。

【一刀】
「……あぁーっ！今日の政務、全然手を付けてないっ！」

慌てて執務室に向かった一刀…そこには、新たに積み上げられた書類（竹簡）の山が…。

【一刀】
「い、いやーーーーっ！」
ムンクの『叫び』並に顔を歪め、絶叫を放つ一刀…だが、泣き叫ぼうが、王の覇気を纏おうが、竹簡の数が減るわけではない。

【一刀】
「…今日も、徹夜だな…」
観念したのだろう、一刀は一人黙々と仕事に取り掛かった。
仕事を始めてから小一時間…竹簡の山は、まだ一割ほどしか開拓されていない。

【一刀】
「っはあ～…日付が変わる前に終わらせたいなぁ…」
日も沈み、既に完全に夜となってしまった今、執務室の周りは静寂に支配されていた。竹簡を開いたり丸めたりした時の、カラカラカラッという音しか聞こえない…耳が痛むほどの静けさは、却って一刀の集中力を奪っていた。
と、そこへ…

【愛紗】
「ご主人様…」

【一刀】
「愛紗。どうした、こんな時間に？今日は大変だっただろう？明日からも忙しくなるんだし、休める時にしっかり休んでおいた方がいいぞ。」

【愛紗】
「ご主人様こそ…無理をなさらないで下さい…」

【一刀】
「うん、分かってる。ありがとう。」

そう言って、一刀は愛紗の頭を撫でた。

【愛紗】
「ご、ご主人様！」真面目に聞いて下さい！それに、私はもう子供ではありません。」

【一刀】
「ごめん、嫌だった？」

【愛紗】
「い、いえ…」

【一刀】
「よかった。」

愛紗の返事に安心し、一刀は再び彼女の頭を撫ではじめた。

【一刀】
「正直言うとさ、毎日思うんだ。俺なんかに、一体何が出来るんだって…天の御遣いだなんて、おこがましいにも程があるって…」

【愛紗】
「ご主人様…」

【一刀】
「だけど…天の御遣いとしてしか、この世界で生き抜く方法が無いんだよな。」

【愛紗】
「っ！」

【一刀】
「まぁ、大丈夫。何とかなるよ…明日からは、朱里や雛里にも手伝ってもら…う？」

一刀の言葉を遮るようにして、胸にぶつかる小さな衝撃…

【一刀】
「…愛紗？」

【愛紗】
「そんな事はありません…天の御遣いではなくても…私はご主人様を守り続けます。傍でずっと、支えています…ですからどうか、お一人で何もかも背負おうとしないで下さい…」

【一刀】
「……あぁ。ありがとう、愛紗…」

愛紗の体を抱きしめ返した一刀は、彼女の体が想像よりずっと華奢だったので驚いた。この細く柔らかな体の何処に、あんな得物を振り回す力があるのか、不思議でならない。
そんな愛紗の体は、まるで収まるべき処に収まるかのように一刀の腕の中に馴染んでおり、こうしているだけで二人は何とも言えない

充足感を得られた。
そのまま、二人はしばらく抱き合い続けていた。

愛情度
愛紗１．３→２．３
桃香１．２→１．５

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8313u/

蒼・天～蒼き死神と、天の御使い～

2011年12月4日02時47分発行